

笛吹市文化財調査報告書 第9集

山梨県笛吹市

町屋遺跡

市道八代711、719、758号線改良に伴う

埋蔵文化財調査報告書

2008

笛吹市教育委員会
(財)山梨文化財研究所

序

町屋遺跡は笛吹市八代町米倉と永井に跨っており、古代瓦を出土した瑜伽寺はじめ狭い範囲に寺の多い地域である。本文にもあるとおり、市役所八代支所から南西に向かた地域には古代官衙の存在を思わせる地名が隨所に残っております、浅川沿いにある「米倉」は米を集積貯蔵し、水運を利用して笛吹川、富士川へと搬出するための施設があった可能性があると指摘する研究者もいる。米倉以外にも御所、駆之内、保（儘）ノ下、やや東に離れるが高家などがあり、その名前から宮家の係累をもつ古代の官人が活躍していたことの名残が窺える。

御坂山塊から発した幾多の小河川が笛吹川に向かって緩やかに上砂を吐き出し扇状地を形成したが、傾斜は米倉あたりからいっそう緩くなり、甲府盆地の中心に向かってほぼ平坦になる。水は今述べた小河川、また湧き水によって豊富に供給される。ということで、この地の古代の景観は、整然と区画された豊かな田畠が見渡す限り広がっている・・・というものだったと想像する。

いっぽう長閑な田園風景とは裏腹に、「国家」の収税のシステムは細部に渡るまで整備され、住民は生産活動を厳しく統制され、取奪されていたはずであり、彼ら自身の生活が豊かであったとは言えないのが古代社会の現実であろう。

さて、今回の発掘調査は市道拡幅整備にともなうもので、狹小な空間での苦労多きものであったと聞き及んでいる。時期も真冬で、調査を担当された方々、ご助言くださった諸氏・諸機関のお骨折りに感謝を申しあげるとともに、こうしてその成果が公刊されるに至ったことを喜びたい。

平成 20 年 3 月 31 日

笛吹市教育委員会
教育長 山田武人

例　　言

- 1 本書は山梨県笛吹市八代町米倉地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、市道八代 711、719、758 号線改良工事に先立ち、笛吹市教育委員会が主体となって実施した。
- 3 発掘調査は、平成 18 年 1 月 10 日から 2 月 28 日にかけておこなった。
- 4 室内整理・報告書作成作業は、平成 18 年 7 月 1 日から平成 19 年 3 月 31 日までと、平成 20 年 1 月 9 日から同年 3 月 31 日までに分けて、笛吹市より委託を受けた財団法人山梨文化財研究所が実施した。整理業務参加者は、竜沢みち子・平野 修・柳本千恵子である。
- 5 本報告書の執筆・編集・写真撮影等は、平野 修（財団法人山梨文化財研究所）がおこなった。
- 6 本書に係る出土遺物及び記録図面、写真などは笛吹市教育委員会が保管している。
- 7 発掘調査および報告書の作成にあたっては、次の機関及び諸氏から御指導・ご協力を賜った。記して厚く感謝申し上げる。

山梨県教育委員会学術文化財課 (株) テクノプランニング (財) 山梨文化財研究所

河西学 柳原功一 工藤忠誠 中山千恵

調査組織

- 1 調査主体　笛吹市教育委員会
- 2 調査担当　小渕忠秋・平野 修
- 3 調査参加者
伊藤津眞子・岩崎満佐子・長田くみ子・橋田由利子・崔田信一・竜沢みち子・田中真紀美・角田 晃・
萩原 忠・柳本千恵子・渡辺喜乃女

事務局

教育長 山田武人
文化財課長 小川勝明
文化財担当 小渕忠秋
＊ 阿部 煦

凡　　例

- 1 遺構・遺物の縮尺は、原則として各図ごとに示している。
- 2 本書第 1 図で使用している地図は、国土地理院発行の地形図「甲府」(1:50,000) を使用し、第 2 図は、1990 年八代町教育委員会発行『遺跡詳細分布調査報告書 八代町埋蔵文化財調査報告書第 7 集』から転載している。
- 3 遺物の挿図番号は、各遺構ごとに連番で付した。遺物分布図および観察表・本文中の番号は対応している。
- 4 各遺構における遺物分布図で示したマークは、遺物の種類にかかわらず全て●で示している。
- 5 土層および遺物の色調名は、「新版標準土色帳」13 版（農林省水産技術会議事務所監修 小山正忠・竹原秀雄編・著 1993）によっている。
- 6 遺物図版中の平安時代上器および陶器の断面が黒塗りの場合は須恵器を示している。土器内外面の濃い点スクリーントーンは油煙の範囲を、網状のスクリーントーンはウルシ状付着物の範囲、やや薄い点状のスクリーントーンは黒色処理もしくは赤彩を、斜線は磨り面等の二次転用された範囲を示している。また矢印は灰釉の範囲を示している。凹石の外形線に沿った矢印は、擦り面の範囲を示している。

本文目次

序

例言・凡例

目 次

挿図目次

写真図版目次

表目次

第Ⅰ章 調査の経緯と概要	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	1
第Ⅲ章 調査方法と層位	4
第Ⅳ章 検出された遺構と遺物	9
第1節 竪穴建物跡[SI]	9
第2節 土坑・ピット[SK]	11
第3節 溝状遺構・旧流路跡[SD]	11
第4節 遺構外出土遺物	12
第5節 試掘調査出土遺物	12
第Ⅴ章 まとめ	13

写真図版

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺官衙関連・寺院遺跡分布図	2
第2図	周辺遺跡分布図	3
第3図	試掘トレーン配置図	4
第4図	測量区およびグリッド設定図	5
第5図	遺構配置図	7・8
第6図	SII-2・4号竪穴建物跡、SK1	21
第7図	SI2・3号竪穴建物跡	22
第8図	SI5・6号竪穴建物跡、SK10～15・19・20・47・48	23

第9図	SI6・7号竪穴建物跡、SK21～29・33～46	24
第10図	SI7号竪穴建物跡、SK2～5	25
第11図	SK6～9、SD1～3	26
第12図	SK16～18・24～27・29～32・41～44、SD4～6・8・9	27
第13図	SI1・2出土遺物	28
第14図	SI2出土遺物	29
第15図	SI2・3出土遺物	30
第16図	SI4・5出土遺物	31
第17図	SI6・7出土遺物	32

第18図	SI7、SK1～3・5・7・10出土遺物	33
第19図	SK11・13・14・16・19・20～22・31出土遺物	34
第20図	SD2～4・6、遺構外出土遺物	35
第21図	遺構外出土遺物	36
第22図	試掘調査出土遺物(1)	37
第23図	試掘調査出土遺物(2)	38

写真図版目次

図版1	1. 遺跡調査前状況 (第1トレーン付近、東から) 2. 遺跡調査前状況 (第2・3トレーン付近、南から) 3. 遺跡調査前状況 (第2トレーン東西ライン付近、西から) 4. 重機によるトレーン掘削風景 1・5. 重機によるトレーン掘削風景 2・6. 調査風景 1・7. 第2トレーン東西ライン完掘全景 8. 第2トレーン東西南北ライン完掘近景 (南東から) 9. 第2トレーン南北ライン・第3トレーン完掘近景 (南東から) 10. 第3トレーン完掘近景 (北から) 11. 第3トレーン完掘近景 (南から) 12. 第1トレーン (SD8・9) 完掘全景 (南から) 13. 第1トレーン (SD8・9) 西壁南側セクション (北東から) 14. 第1トレーン (SD8・9) 西壁北側セクション (北東から) 15. 第2トレーン (SD7) 検出状況 (東から)	
図版2	16.SII 完掘状況 (南東から)	

17.SII 遺物出土状況 (南から)		
18.SII カマド完掘状況 19.SI2・4完掘状況 (西から) 20.SI2 カマド完掘状況 21.SI2 カマド遺物出土状況 22.SI2 カマド協達物出土状況 23.SI3 完掘状況 (西から) 24.SI3 カマド検出状況 25.SI3 横状施設セクション 26.SI3 横状施設上面出土土器 27.SI4 遺物出土状況全景 (南東から) 28.SI4 遺物出土状況近景 29.SI5 完掘状況 (東から) 30.SI5 内面仕切り施設等検出状況 (南から)		
図版3	31.SI6 完掘状況 (東から) 32.SI6 内 SK14・15・19・20 完掘状況 (南から) 33.SI6 内 SK14 遺物出土状況 34.SI6 内 SK10・12 検出状況 35.SI7 完掘状況 (南西から) 36.SI7 カマド検出状況 37.SI7 カマド周辺部遺物出土状況 (西から) 38.SI7 カマド前面土器出土状況 39.SI7 カマド南脇遺物出土状況 40.SI7	

内 SK21 遺物出土状況 41.SI7 内 SK21 遺物出土状況近景 42.SK1 検出状況 (東から) 43.SK2 検出状況 (西から) 44.SK3 遺物出土・完掘状況 (北東から) 45.SK3 遺物出土状況		
図版4	46.SK4・5 完掘状況 (西から) 47.SK5 完掘状況 (東から) 48.SD1・SK6・7 完掘状況 (北東から) 49.SK6・7 完掘状況 (南東から) 50.SK9・SD2 完掘状況 (東から) 51.LSK9 完掘状況 (北から) 52.SK21～29・40～45 等完掘状況 (南から) 53.SK32 完掘状況 (南から) 54.SD3 完掘状況 (東から) 55.SD3 遺物出土状況 56.SD4 完掘状況 (北から) 57.SD5・6・SK31 完掘・遺物出土状況 (南から) 58.SD6・SK31 遺物出土状況 (北から) 59. 調査風景 2・60. 調査風景 3	
図版5	出土遺物①	
図版6	出土遺物②	
図版7	出土遺物③	

表目次

第1表	町屋遺跡 SK (土坑・ピット) 一覧表	15
第2表	町屋遺跡出土土器観察表	16

第3表	町屋遺跡出土石製品観察表	19
第4表	町屋遺跡出土金属製品観察表	20

第5表	町屋遺跡出土石製品観察表	20
-----	--------------	----

第Ⅰ章 調査の経緯と概要

今回報告する町屋遺跡の発掘調査は、事業主体者である笛吹市が、同市八代町米倉47-2番地外において市道改良工事を計画し、市教育委員会に埋蔵文化財の有無の照会をおこなってきた。市教育委員会では遺跡地図との照合をおこなった結果、周知の埋蔵文化財包蔵地である「町屋遺跡」内に位置しており、現地踏査でも平安時代を中心とする遺物の散布が認められた。そのため、文化庁および山梨県から補助金を受け、計画予定地内の埋蔵文化財の有無を確認するため、平成17年10月11日から10月21日にかけて試掘調査を実施した。

その結果、豊穴建物跡の床面と思われる硬化面と多量の平安時代の上器資料が出土したことから、山梨県教育委員会学術文化財課と笛吹市で協議をおこなったところ、遺構密度が濃いと思われる計画予定地西側の約1,550mを対象に記録保存を目的とした発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成18年1月10日から2月28日まで実施し、その結果、平安時代を中心とする豊穴建物跡（SI）7棟、土坑・ピット（SK）48基、溝状遺構・旧流路跡（SD）9条が検出された。なお、整理作業および報告書作成業務は、発掘調査終了後、平成18年度、19年度の各年度ごとに（財）山梨文化財研究所に委託して実施し、平成20年3月に報告書刊行に至った。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境

山梨県笛吹市は、平成16年10月に、旧東八代郡八代町、石和町、御坂町、一宮町、境川村、東山梨郡春日局町が合併して発足し、平成18年8月には東八代郡芦川村を編入合併し現在に至っている。そのうち町屋遺跡が所在するのは、旧東八代郡八代町域であり、現所在地は山梨県笛吹市八代町となっている。

現笛吹市八代町域は、甲府盆地の南東縁に位置し、南東部には御坂山脈の中央部の山地が広がり、北側に笛吹川、東側に天川、西側に浅川が流れる。御坂山地から甲府盆地に向かって神座山を水源とする浅川が西流し、その浅川を主体として形成された浅川扇状地が展開している。町屋遺跡は浅川の右岸の緩やかな傾斜をもつ標高295m前後を測る扇状地上に立地し、さらにその微高地と網状に展開する埋没旧河道が入り組む微高地に立地している。

第2節 歴史的環境

御坂山地の山麓から浅川扇状地にかけての一帯は、縄文時代からの遺跡が濃密に分布する地域と知られ、特に縄文時代では、前期の集落遺跡である花鳥山遺跡が挙げられる。多量の上器群の他、獸骨や魚骨、堅果やエゴマなど当時の食生活に関する幅広い自然資料が出土した遺跡として知られる。また、弥生時代後期の集落遺跡である身洗沢遺跡は県内ではじめて水田跡が検出された遺跡として知られる。

甲府盆地において濃密な古墳の分布域である曾根丘陵の東端に属し、古墳時代には八代町岡にある岡銚子塚古墳をはじめとして前方後円墳や、県内唯一の方墳である八代町米倉の竜塚古墳など数多くの古墳が分布する。特に岡銚子塚古墳は畿内色を持つ甲斐銚子塚古墳（甲府市・旧中道町）の盟主墳とも考えられている。旧八代町域は古代甲斐国における初期王権の成立過程においても注目されており、古墳後期から奈良時代・平安時代にかけての集落遺跡も分布し、永井に所在する瑜伽寺では、白鳳～天平期の薬師如来塑像をもち、甲斐國分尼寺出土瓦と同范と思われる軒平瓦が出士しているとされている。



第1図 遺跡位置と周辺官衙連関・寺院遺跡分布図 (1/50,000)

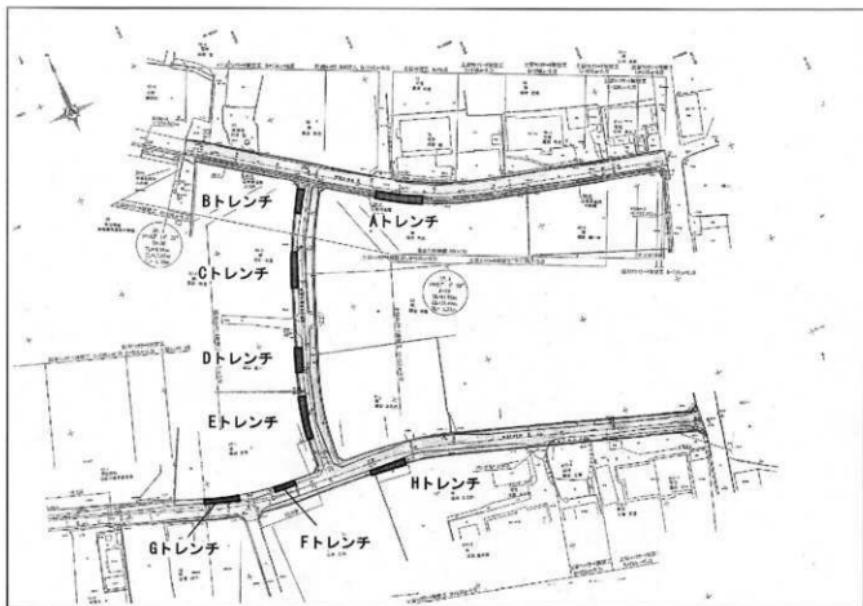
1. 可經道路 2. 瑞應寺 3. 堀ノ内遺跡 4. 推定國衙跡
5. 國分寺 6. 國分尼寺 7. 寺本庶寺および國府遺跡



第2図 周辺遺跡分布図

1 聖母ノ内	19 身洗溝	37 長妻裏	55 香ノ上戸	73 駒車	91 潤水	109 土耕	128 非財大澤古墳	160 猿子保古墳	200 聖母ノ内
2 稲垣	20 鶴道	38 下西	56 山ノ上戸	74 鶴留斗	92 田中畠	110 花島山	139 黒崎古墳	164 石原古墳	201 武田瀬守古墳
3 神ノ木	21 三原衣	39 向原	57 高ノ上北	75 丸山	93 早畠田	111 滝沢之上	140 佐見(注家)古墳	165 朝経丸古墳	202 魔成寺古墳
4 伊賀	22 北ノ头	40 横岸	58 寛平	76 高小山A	94 法原古墳	112 切付平	142 物見塚古墳	166 幸幡古墳	203 朝日原古墳
5 矢ノ懸	23 伊賀	41 伊賀	59 伊賀	77 高小山B	95 伊賀古墳A	113 伊賀	143 伊賀古墳	167 伊賀古墳	204 伊賀古墳
6 伊賀	24 下石天	42 伊吹天	60 伊勢之宮	78 東小山C	96 八反古B	114 大曾井	144 鹿波奈古墳	175 別所御古墳	205 下新兵站古墳
7 沢又木	25 高見度	43 長崎	61 上小下	79 宮ノ後	97 一前田	115 須山原	145 猪守前古墳	176 駒塚古墳	206 泊人屋敷
8 角田	26 安治度	44 五里原	62 久住A	80 中丸	98 伊ノ木田	116 猿子原	147 伊勢志古墳	182 わこり原古墳	207 犬塚古墳
9 伊賀	27 長沢	45 高見澤	63 下船之木	81 伊賀	100 伊賀	117 伊賀	148 長澤古墳	183 こぢり原古墳	208 大沢古墳
10 五郎	28 伊賀	46 伊賀下	64 伊賀下	82 伊賀	101 伊賀	118 伊賀	149 田代子原古墳	184 田代子原古墳	209 五郎古墳
11 六日	29 下長崎	47 神田	65 金糞	83 伊田	102 伊賀	119 大仏原	150 双子原古墳	185 佐純二号墳	210 五郎三郎原古墳
12 朝日	30 霧氣	48 旗	66 霧氣	84 土井原	103 伊賀	120 大仏	151 双子原古墳	186 佐純二号墳	
13 重田	31 南原	49 二子原	67 闘原B	85 沢原	103 中原	121 金山	152 鹿崎古墳	187 八幡原古墳	
14 鹿原B	32 重原・街田	50 内	68 トモ原	86 野原	104 伊賀	122 大和原	153 鹿崎原古墳	188 大和原古墳	
15 重原	33 司原	51 大庭	69 トモ原	87 旗原	105 沢原	123 上ノ平A	154 大和原古墳	189 久保原	
16 鹿原A	34 今宮	52 和泉	70 五反原	88 痘・村上	106 久保原	124 上ノ平B	155 久保原古墳	190 久保原	
17 法田	35 天神原	53 竹之内	71 大野	89 泥原	107 旗木	125 大曾谷A	156 旗木原古墳	191 旗木原	
18 芦川	36 宮之	54 畦田	72 田畠原	90 大久保	108 竹原・朝崎	127 八幡さき古墳	157 旗木原古墳	192 旗木原	

※スクリーントーン表示
は多量削除標記



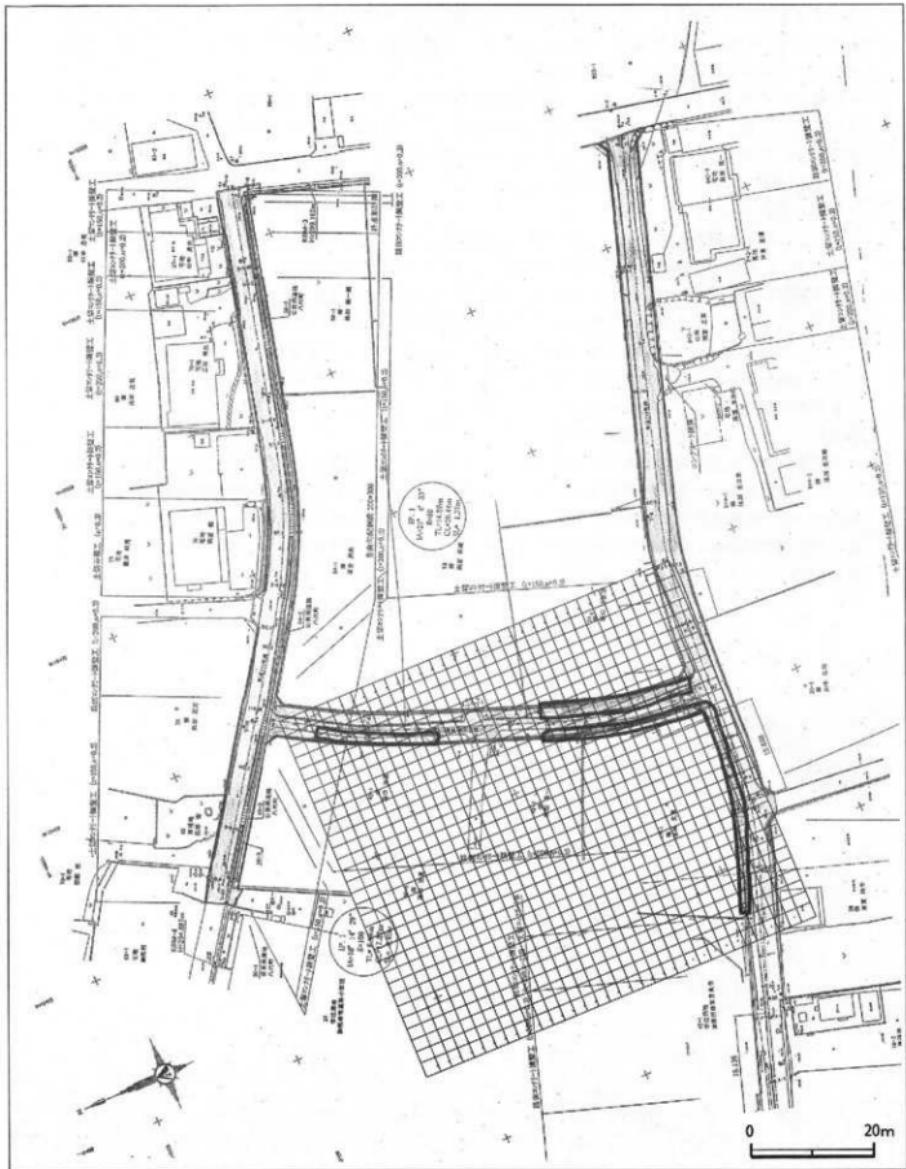
第3図 試掘トレーニング配置図

現在の笛吹市域は、律令制下では山梨郡と八代郡に属し、「和名類聚抄」の記載には「国府は八代郡にあり」とみえ、笛吹市御坂町国衙をその遺称とみなす説が有力である。郡では、町屋遺跡のある笛吹市八代町は八代郡と長江郡に比定されている。八代郡は郡名の由来にもなっており、高家や米倉といった郡家や古代官衙に関わる地名遺称もみられることから、郡家やその他の官衙施設が所在した地である可能性も極めて高い。旧八代町域には、先の浅川沿いには官道ではないが、甲斐國と東海道を結ぶ古道である「若彦路」が通っており、日本武尊（ヤマトタケル）に関する伝承が残されているとともに、中世には甲斐源氏挙兵時に利用されたとされている。

平安時代には熊野社領となる八代荘が成立し、「長寛勘文」にみられる国司と荘園領主の対立から、国司側が敗北した荘園停廃事件が起こる。この事件に連座した在庁官人の三枝氏は没落し、中世には国中地方の各地で勢力を広げた甲斐源氏の一族が町域にも進出する。

第Ⅲ章 調査方法と層位

発掘調査は、前述したとおり、試掘調査の結果を受け開発予定地内の西側部分を中心におこなった（第3・4図参照）。調査は道路拡幅部分および擁壁部分の、極めて狭い幅のトレーニング調査となっている。調査区は幅約25m、長さ約25mを測る南北方向に延びるトレーニングが一箇所、そして幅約1.5m、長さ約20mを測る、同じく南北方向に延びるトレーニングがもう一箇所。さらに幅約1.5m東西方向約35m、南北方向約25mを測る逆L字状を呈するトレーニングが1箇所、計3箇所となっている。調査の便宜を図るために、前



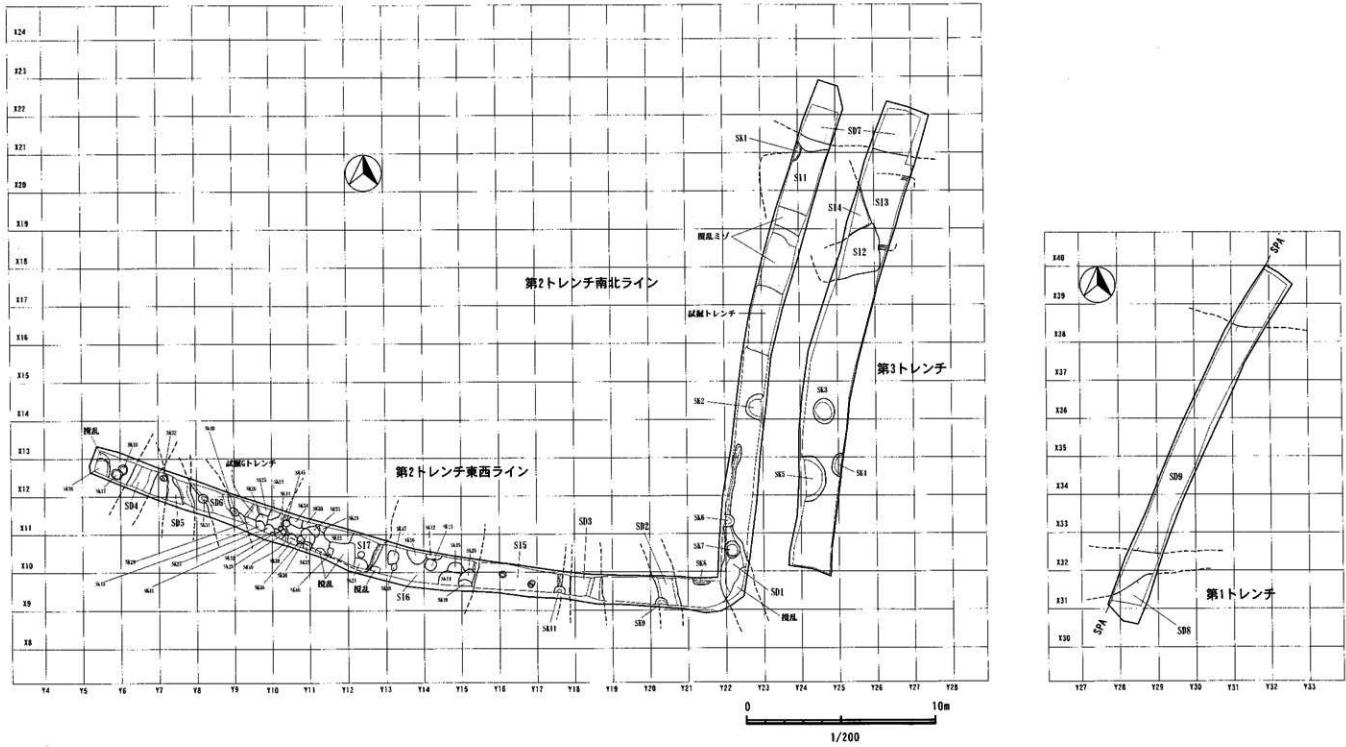
者のトレーンチを「第1トレーンチ」、中者を「第3トレーンチ」、後者を「第2トレーンチ」と呼称し、さらに東西方向に延びる箇所を「第2トレーンチ東西ライン」、南北方向に延びる箇所を「第2トレーンチ南北ライン」とした。発掘調査面積は合計200m²である。

重機による表土剥ぎ作業の終了後、計画予定地全体を覆うように国土地標にあわせて、南北方向をX軸、東西方向をY軸とし、2mメッシュを基本とするグリッドを設定した。南西隅を基点として、世界測地系座標 X = -43300.000、Y = 12100.000を原点(X=0, Y=0)としている。グリッドの名称は南北方向を南から X0・X1・X2…、東西方向を西から Y0・Y1・Y2…とし、南西隅を基点として、X1Y1グリッドと呼称した。

表土および盛土層の除去・掘削については、重機を使用したが、遺構調査については、すべて人力で覆土を除去し、発生土の排出についても人力でおこなった。確認された遺構は、確認されたものから順次遺構番号を付して調査をおこなっていったが、重複し新旧関係が不明瞭な遺構については、同時に調査をおこない、土層観察・出土遺物の様相から新旧関係の決定をおこなってから遺構番号を付したものもある。

出土した遺物については、原位置が判明する直径3cm以上の大きさを測る土器片等については、極力、光波測量器によって各遺構および出土地点ごとにナンバリングして取り上げていった。遺構の測量についても光波測量器による平面測量を中心とし、カマドなど小規模な遺構については1/10・1/20の縮尺を基本として、平板測量と造り方測量も併用した。

本遺跡における基本層位を第2トレーンチでみると（第6・8図等参照）、現表土・現耕作土および旧耕作土直下で遺構確認面（黄褐色砂質土:10YR5/8 小礫含む）が表出し、南北ラインでは遺構確認までおよそ30～40cm、東西ラインではおよそ50～70cmを測る。竪穴部壁の残存高をみると、南北ライン、東西ライン検出竪穴建物跡ともほぼ同程度であり、確認面までの深さのレベル差は、北東から南西にかけて地形的に傾斜していることが要因であろう。



第5図 造構配置図

第IV章 検出された遺構と遺物

第1節 竪穴建物跡 [SI]

SI1 (第6・13図)

(位置) 第2トレーナ南北ラインの北端部分、X18～21・Y23・24グリッドにて検出。(重複・遺存状況) SK1に掘り込まれ、現地境溝と思われる搅乱坑により、本遺構南側が破壊されており、遺構の大半は調査区外に延びている。(形態・規模等) 形態は隅丸方形を呈するものと思われ、南北軸は4.5m以上を測る。(壁・壁溝・床面等) 壁溝は不明。竪穴部の確認面からの深さは最大44cmを測り、床面は貼床で、カマド前面部がやや堅固。(柱穴) 柱穴北壁際で小ピットが1基検出されているのみ。(カマド) 北壁において検出。焼上範囲として確認され、遺存状態は悪く燃焼部掘り方と石製支脚が検出されたのみ。(出土遺物) カマド周辺部を中心に散在的に出土しており、床面直上レベルのものが多い。および貼床内からの出土が多い。土師器壺(刻書き土器含む)・甕、土師質柱状高台片、須恵器甕などが出土。(時期) 8世紀前半～中頃。

SI2 (第6・7・13・14)

(位置) 第3トレーナ北端部分、X17～19・Y24～26グリッドにて検出。(重複・遺存状況) SI3・4と重複し、SI1とも重複していると思われる。SI4に掘り込まれていることは明確だが、SI1・3との新旧関係は不明瞭。出土遺物の時期から、SI1より新しく、SI3より古い。(形態・規模等) 形態は隅丸方形を呈するものと思われるが不明。規模も不明で検出された南北軸約2.4m、東西軸約2.5mの範囲を検出。(壁・壁溝・床面等) 壁溝は南壁下において一部検出。竪穴部の確認面からの深さは最大35cmを測り、床面は全体的にやや軟弱。(柱穴) 不明。(カマド) 東壁において石組カマドを検出。右袖部の石組は抜き取られ、燃焼部埋土上部に掘え置かれたような状態で検出。人為的な破壊行為がうかがわれる。(その他施設) 南東コーナー部にち長方形を呈する貯蔵穴状の掘り方を検出。長軸0.90m、短軸0.58m、深さ0.18mを測る。カマド構築土に被覆されており、さらに埋土上面から土師器壺や礫が出土しているため、貯蔵穴ではなく、竪穴部掘り方の可能性もある。(出土遺物) 遺物の出土量は多いが、出土レベルの幅も広く、時期的にも8世紀代と10世紀代とバラツキがみられる。土師器壺(墨書き・刻書き土器含む)・甕、須恵器壺・甕、灰釉陶器碗などが出土している。(時期) カマド内出土遺物および床面直上遺物の時期から8世紀後半としておきたい。

SI3 (第7・15図)

(位置) 第3トレーナ北端部分、X18～20・Y26・27グリッドにて検出。(重複・遺存状況) SI2・4と重複している。各遺構との新旧関係は不明瞭。出土遺物の時期からも、SI2より新しいと判明するが、SI4とは時間差がみられない。(形態・規模等) 形態は隅丸方形などを呈するものと思われるが全容は不明。南北軸の規模については、現状で4.05mを測る。東西軸については不明である。(壁・壁溝・床面等) 壁溝は東壁の一部において確認されているにすぎない。確認面からの竪穴部の深さは最大56cmを測り、床面はカマド前面部で一部堅固な範囲を確認。(柱穴) 北壁際で柱穴状のピットが1基検出されているが、柱穴かどうかは不明。(カマド) 東壁において、その前面部の一部を検出。石組み。確認段階では、袖石と思われる礫が床直でカマド北脇の床面直上から出土。燃焼部埋土上面からも出土。焼土の残存は顯著ではない。(その他施設) カマド右袖に付随するように棚状施設が付設されている。2～3層から成る盛土層で構築されている。その上面に接する状態で、「大」と墨書きされた土師器壺が正位で出土している。(出土遺物) 遺物の出土量は、全体的にあまり多くないが、土師器壺・皿・甕、須恵器蓋・壺・甕などが出土。特筆されるものとして、土師器壺でウルシ付着の刻書き土器や、前述した「大」と記された墨書き土器が挙げられる。(時期) 9世紀末～10世紀初頭。

SI4 (第6・16図)

(位置) 第3トレーナ北端部分、X18～20・Y25～26グリッドにて検出。(重複・遺存状況) SI2・3と重複し、

SI1 とも重複していると思われる。SI2 を掘り込んで構築しているが、SI1・2 との新旧関係は不明瞭。(形態・規模等) 形態は隅丸方形を呈するものと思われるが全容は不明で、規模は検出された現状で南北軸約 2.3 m.、東西軸約 1.3 m を測る。(壁・壁溝・床面等) 壁溝は不明。竪穴部の確認面からの深さは最大 34 cm を測り、床面は多少硬化しているものの、概して軟弱である。(柱穴) 不明。(カマド) 不明。(出土遺物) 遺物の出土量は多い。土師器壺(墨書き土器含む、「大」)・高台壺(刻書き土器含む)・皿(墨書き土器含む、「大」) 瓢、須恵器壺などの小片が出上している。(時期) 9世紀末～10世紀初頭。

SI5 (第 8・16 図)

(位置) 第 2 トレンチ東西ライン東側、X9・10Y15～17 グリッドにて検出。(重複・遺存状況) SI6 および SK11 と重複し、いずれの遺構にも掘り込まれており、大半が調査区外に延びている。(形態・規模等) 形態は不明。検出規模は東西軸約 4.5 m を測る。(壁・壁溝・床面等) 壁溝は東壁下において一部検出。竪穴部の確認面からの深さは最大約 21 cm を測り、床面は全体に堅固である。SK14 の上面を中心とする床面上には、炭化物層の範囲が認められた。(柱穴) 柱穴と思われる径 26～35 cm、深さ 25～40 cm を測るビット 1・2 が検出されているが、断定はできない。(カマド) 検出されていないが、北面セクションかかるように、ややまとまった扁平な礫が検出されている。これら礫が抜き取られたカマドの袖石である可能性も考えられる。(その他施設) 床面中央付近において小ビットを伴う幅 18～20 cm、深さ 5～6 cm を測る小溝が逆 L 字状にみられ、これは間仕切り施設に伴う溝と思われる。また、ビット 3 のように、根石のような小礫を伴って扁平な礫を埋設しているビットや、床面に据え置かれたような扁平な礫がみられるが、これは柱の礎石となる可能性もある。(出土遺物) 遺物の出土量は、あまり多くない。竪穴床面直上レベルの竪穴中央から東側にかけて散在的に出上している。土師質土器皿・壺、白磁碗片などが出土している。(時期) 11世紀末～12世紀初頭。

SI6 (第 8・9・17 図)

(位置) 第 2 トレンチ東西ライン中央部分、X9・10Y12～15 グリッドにて検出。(重複・遺存状況) SI5 および SK10・12・13～15・19・20・47・48 と重複しているが、SK13～15・19・20・47・48 は、十層断面観察から本竪穴に伴う床下土坑と判断される。東側は、SI5 を掘り込み、SK10・12 に掘り込まれている。西壁は欠失しているが、トレンチ北面の断面観察の結果、西壁の立ち上がりが確認できた。(形態・規模等) 形態は隅丸方形を呈するものと思われるが全容は不明で、東西軸は約 4.8 m を測る。(壁・壁溝・床面等) 壁溝は東壁下において一部検出。竪穴部の確認面からの深さは最大 35 cm を測り、床面は竪穴中央部から東側にかけて堅固である。(柱穴) 小ビットは数基検出されているが、柱穴になるかどうかは不明。SK48 では SI5 ビット 3 と同様に、扁平な礫が埋設された状態で検出されており、これも柱礎石となる可能性もある。(カマド) 不明。(出土遺物) 遺物の出土量は多くない。当初 SK14・19・20・47 に伴う出土として取り上げた遺物も、本来は本竪穴建物跡に伴う遺物群として捉えられる。土師質皿、土師質鍋片、灰釉陶器片、青白磁片、須恵器甕片(二次転用品含む)などが出上している。(時期) 11世紀末～12世紀初頭。

SI7 (第 9・10・17・18 図)

(位置) 第 2 トレンチ東西ライン西側、X10・11Y10～12 グリッドにて検出。(重複・遺存状況) SK21～23・33～39・45・46 などと重複するかたちとなっているが、これらは検出面からいずれも本竪穴建物跡に伴う床下土坑および掘り方だと思われる。南壁側東寄りでは、烟窓溝におけるスプリンクラーの送水管の埋設に伴う搅乱坑によって破壊されている。(形態・規模等) 形態は隅丸方形を呈するものと思われるが全容は不明で、東西軸は約 5.8 m を測る。(壁・壁溝・床面等) 壁溝は東壁下および西壁下において一部検出。竪穴部の確認面からの深さは最大 34 cm を測り、床面はカマド周辺部のみやや堅固。(柱穴) 柱穴状のビットが数基検出されているが、柱穴になるかどうか不明。(カマド) 東壁に付設されているものの、その大半は調査区外にあり、右袖部の側面部を検出したに過ぎない。長軸 0.77 m を測り石組である。カマド南側の床面上には、カマドに伴うと思われる焼上範囲が認められた。(出土遺物) 遺物の出土量は多い。カマド前面およびその南側などの床面直上レベル、SK21 などの床下土坑内からの出土が多い。土師質土

器坏・皿・鍋、台状底部をもつ皿、植物繊維痕がみられる粘土塊などが出土している。また、後述する試掘調査 G トレンチの出土の遺物群のほとんどは、その出土位置から本竪穴式建物跡に伴う遺物群であると思われ、高台部に穿孔を施した灰釉陶器碗、灰釉陶器壺、鉄製紡錘軸などがある。(時期) 11世紀末～12世紀初頭。

第2節 土坑・ピット [SK] (第6～12・18～19図)

今回の調査で、SK No. 付して検出した土坑・ピットは計 48 基である。この中には、先に報告した竪穴式建物跡に伴う床下土坑のものも含まれている。各遺構の規模等のデータについては、後掲第1表の一覧表にまとめたので、それを参照されたい。

第3節 溝状遺構・旧流路跡 [SD] (第5・6・11・12・20図)

本調査では計 9 条検出されている。いずれも部分的な検出のため、その全体像は不明で、用途・性格も不明な点が多い。

SD1 (第 11 図)

X9～13Y21・22 グリッドに位置し、南北方向に延びる溝状遺構である。SK6・7 などと重複しており、本遺構が SK6 に掘り込まれ、SK7 の上部に構築している。南側は搅乱により欠失しているが、さらに南側の調査区外に延びると思われる。幅 0.35～1.2 m、確認面からの深さ 15 cm ほどを測り、断面形態はじ字状ないし浅いナベ状を呈している。出土遺物はほとんどみられないため、詳細な所属時期は不明。

SD2 (第 11・20 図)

X9Y20 グリッドに位置し、南北方向に延びる溝状遺構である。SK9 と重複しており、同遺構に掘り込まれている。南側は搅乱により欠失しているが、さらに調査区外に延びると思われる。幅 1.1 m 前後、確認面からの深さ 21～30 cm を測り、断面形態はナベ状を呈している。出土遺物は土師器壺、須恵器壺の小片がわずかに出土しているにすぎない。詳細な所属時期は不明。

SD3 (第 11・20 図)

X9Y18・19 グリッドに位置し、南北方向に延びる溝状遺構である。幅 1.7 m 前後、確認面からの深さ 18 cm を測る。断面形態はナベ状を呈している。土師質土器および灰釉陶器の小片が散々に出土している。所属時期は、出土遺物の状況からすれば、11～12世紀代と考えられようか。

SD4 (第 12・20 図)

X12Y6 グリッドに位置し、北東～南西方向に延びる溝状遺構である。幅 1.2～1.3 m 前後、確認面からの深さ 40 cm を測る。断面形態はナベ状を呈している。覆土上層部から灰釉陶器片、弥生時代赤彩土器小片が散々に出土している。詳細な所属時期は不明。

SD5・6 (第 12・20 図)

X11・12Y7～9 グリッドに位置し、北西～南東方向に延びる溝状遺構であり、SD6 が SD5 を掘り込んでいる。SD5 は、幅 1.2～1.4 m 前後、確認面からの深さ 40 cm を測る。断面形態はナベ状を呈し、覆土内には小礫を多く含んでいる。SD6 も、幅 1.2～1.4 m 前後、確認面からの深さ 40 cm 前後を測る。覆土上層からおもに遺物は出土しており、10世紀後半代を中心とする土師器坏(墨書き器含む)・小型壺片・古墳時代 S 字口縁壺片などが出土している。所属時期については、出土遺物が覆土上層に限らるため詳細は不明だが、10世紀後半段階まで機能していた可能性は高い。

SD7・8・9 (第 5・6・12・20 図)

これらは、第 1 トレンチおよび第 2・3 トレンチ北端部で確認された旧流路跡である。東方から西方へ流下していると思われ、SD7 はその南端の一部、SD8 もその北端の一部を検出したにすぎず、SD9 は幅

約13mを測る。いずれの旧流路も表上下約30cm前後で、拳大から人頭大ほどの礫を多量に含む砂礫層が露出し、SD9ではその内部で幾たびか流路を変更している状況が看取でき、かなりの水流があったことがうかがわれる。出土遺物は少ないが、SD9から8世紀後半代および9世紀前半代の土師器が出土しており、次節の遺構外出土遺物で掲載している。

第4節 遺構外出土遺物（第20・21図）

1～3は、SD9から出土した土師器坏片である。1・2は9世紀前半代の土師器坏で、1の底部外面には墨書きがみられるが判読不可能。3は8世紀後半代の土師器坏底部破片で、外面には刻書きがみられるが、これも判読不可能。4～8は、3トレンチ出土の土師質土器片、染付、瓦片である。9～15は、3トレンチ出土の土師器坏・壺、土師質土器片、古墳時代のS字口縁壺片である。

第5節 試掘調査出土遺物（第22・23図）

ここでは、試掘調査時に出土した主な遺物についてトレンチごとに紹介しておく。1・2は試掘Bトレンチ出土で、SD9に伴うかどうか不明だが、摩滅がほとんどみられない。1・2はロクロ整形の土師器壺で、接合接点は見出せなかったが、両者は同一個体だと思われる。ロクロ整形の土師器壺の中心的な分布域は、旧伊豆郡にあり、8～9世紀代に盛行する。八代郡域での出土事例は珍しく、地域間の交流を考えるうえで貴重な資料と言えよう。3・4は試掘Cトレンチ出土の灰釉陶器片と須恵器短頸壺片である。トレンチの設定位置から旧流路内出土だと思われる。5・6は試掘Eトレンチ、7は試掘Fトレンチ出土の須恵器蓋・壺、内面黒色処理を施した土師器椀である。これらは本調査第2トレンチX9～14Y18～23グリッドあたりに位置する。8～27は、試掘Gトレンチ出土遺物で、出土位置は本調査SI7検出範囲に重なっている。27の打製石斧を除いて、ほぼすべてSI7に伴うものであろう。この中で24の灰釉陶器椀は、高台部付け根部分に3箇所に焼成前の穿孔を施しており、さらに底部内面は磨られたような痕跡があり、その用途が問題となろう。

28～30は、試掘Hトレンチ出土の古墳時代のS字口縁壺および壺片である。28は小型のS字口縁壺であり、祭祀等に使用された可能性が考えられる。本調査では調査区は設定されなかったが、今回の調査地の東側に当該期の遺構群が存在する可能性が高い。

第V章　まとめ

これまでの報告のとおり、今回の町屋遺跡の発掘調査では、奈良時代および平安時代の堅穴建物跡を中心とする遺構群が検出された。出土した上器群の年代観から、各堅穴建物跡の詳細な時期をみると、8世紀前半で1棟(SI1)、8世紀後半で1棟(SI2)、9世紀末～10世紀初頭2棟(SI3・4)、11世紀末～12世紀初頭3棟(SI5・6・7)、計7棟である。しかし部分的な調査であったため、集落の広がりや遺構群の変遷や展開といった集落の全体像を把握することは難しい。よってここでは、今回検出された堅穴建物について取り上げ、そこからみえる遺跡の特質についてふれてみたい。

出土遺構から町屋遺跡における特質を考えるうえで、一つの手がかりになるのが、棚状施設をもつSI3号堅穴建物跡(以下、SI3とする)である。SI3はすでに報告したとおり、第3トレンチ北端部分で、SI2・4と重複して検出されている。出土土器の年代から、9世紀末～10世紀初頭に所属するものと考えられる。各堅穴の新旧関係は出土遺物の年代から、SI2の上部を貼って構築していると思われるが、SI4とは出土上器の年代では時間差はあまりなく不明瞭である。

SI3は、カマドを付設する東壁が調査区外にかかり、カマドも全体の半分程度しか検出できず、煙道部は確認できていない。棚状施設は、そのカマド右袖に取り付くかたちで、堅穴部壁内側に構築されているものだろう。2～3層からなる盛上で構築されており、おそらく堅穴部内部に構築されるタイプのものであろう。大半が調査区外にかかり検出面が狭かったため、硬化面などを把握することができず掘り下げてしまい、断面観察のみの結果となってしまったことが悔やまれる。断面観察では、カマド構築土と同じような褐灰色砂質土を床面上約15cm水平に盛り上げている。さらにその上面には、「人」と記した墨書きされた土器師坏がやや傾いているものの正位で出土している。

この墨書き器は、単に不要品として置き去りにされた遺棄遺物ではなく、墨書き器の性格から鑑み、祭祀行為の痕跡とみてよからう。カマドは部分的検出ながら、袖石と思われる扁平な蝶が、カマド左脇床面に遺棄されており、カマド廃絶に係る破壊行為も想定できるため、この墨書き器もそれと関連する遺物として積極的に捉えておきたい。

棚状施設などの、生活施設を作った堅穴建物跡は、近年山梨県内でも検出事例が増加している。桐生直彦氏によると(桐生2005)、古代甲斐国における山梨・八代・巨麻・都留という旧郡単位では、これまで巨麻郡域を中心に検出されていることが指摘されている。しかし未報告事例も合わせると巨麻郡の他、山梨郡内など他郡でもみられることから、棚状施設をもつ堅穴建物跡が古代甲斐国全域に存在していることも予測できる。ただ、当該期の堅穴建物跡全体の検出数に対しての棚状施設をもつ堅穴建物跡検出数の割合が、堅穴総検出数の数%という状況は、何らかの特殊性を有するものと考えられる。桐生氏は、当該堅穴建物跡の全国集成を試みたうえで、それが検出されている遺跡の特徴を分析し、その結果、手工業生産に関わる集団の遺跡である可能性を指摘している。甲斐国内の事例も、桐生氏の指摘から大きくはずれることはない。

甲斐国内において巨麻郡域に検出事例の偏りがみられる一つの背景として、馬糱生産やその他手工業生産が盛んな地域であることがあげられる。こうした生産に携わった技術者集団が棚状施設をもつ堅穴建物の建築技術を持ち合わせていたと推測することができる。しかし山梨郡内でも、甲斐国分僧尼寺の造営・維持・経営に関わる集落を中心に検出されており、当該集落にも手工業生産集団が集住していた可能性が強く、彼らと建築技術との関係が注目される。

一方、町屋遺跡に目を転じると、町屋遺跡周辺には、郡家クラスの付設される建物現模をもつ掘立柱建物跡が検出された。旧八代町役場所席、現在の笛吹市役所八代支所が所在する堀ノ内遺跡や、甲斐国分僧尼寺出土の瓦と同范とされる瓦や、8世紀代の塑像(薬師如来)が発見されている瑜伽寺などがあり、郡家および郡家附属寺院などが存在したと思われる地域に町屋遺跡は属している。特に堀ノ内遺跡では、6世

紀後半、7世紀前半～8世紀中頃まで継続的に集落が営まれた後、一旦廃絶し、9世紀中頃以降再び集落が営まれはじめ、10世紀以降隆盛する集落がみられ、堀ノ内遺跡のこうした集落の展開が、郡家施設の造営・廃絶の状況を間接的に物語っている可能性が高い。

また、瑜伽寺出土の甲斐国分尼寺同瓦については、国分寺との有機的な関連が強くうかがわれ、単に郡家附属寺院といった性格の他、国分寺を中心とした仏教信仰のネットワークの一つとしてその性格を変化させていった可能性も考えられる。例えば、「定頼寺」といった官寺の一つとして当該地域に存在した可能性も考えられよう。甲斐国における「定頼寺」については文献史料も少なく、その実態や存在すらあまり知られていない。仮に郡家附属寺院から官寺へと変化したという状況が捉えられれば、それは国府と国分僧尼寺造立に伴う八代郡家移転問題とも絡んでくると思われ、今後のさらなる考古学的な資料の蓄積が期待される。

町屋遺跡をはじめとする当該期の周辺集落は、こうした官衙・寺院施設の経営や維持を支えた集落であったことは十分想像できる。町屋遺跡SI3の出土遺物の中に、ウルシ状付着物がみられる土器器坏が数点あるが（第15図 SI3-1他）、それらは手工業生産に携わる集団の存在を想起させるもので、郡家との関連を考えるうえで興味深い。

以上簡単に、8世紀前半から10世紀初頭段階を中心に町屋遺跡の様相の一端を述べてきた。10世紀初頭以降、次に造構としてみられるのは11世紀末段階からである。10世紀末から12世紀にかけて、行政区画の再編や諸勢力による新たなる開発や荘園の成立など、さまざまな動向がみられる時期でもある。11世紀末から12世紀初頭段階の考古資料は、近年、国府周辺地域でも増加している。古代の八代都城や山梨郡域の地表層には条里型土地割が広く展開しているが、詳細な発掘調査がおこなわれていないため、その施工時期は不明であるが、9世紀中頃から10世紀以降、集落が増加する背景には、新たな開発領主による耕地拡大のための条里開発という背景も考えられる。極めて興味深い傾向であるが、今しばらく資料の蓄積を待って検討を試みたい。

最後に、棚状施設をもつ竪穴建物跡をめぐっては、竪穴建物におけるさまざまな生活施設の存在が、近年、調査担当者のあいだでも認識され、その調査事例も増加してきた。棚状施設は、地山面の掘り残しで構築される場合は、比較的検出されやすいものの、盛土構築の場合、床面のように踏み固められることが少ないので、硬化面が形成されにくく、さらに完形土器などの出土遺物を伴わない場合はさらに見逃しやすい遺構である。竪穴建物跡の土層観察用セクションベルトの設定段階から、単に十文字ではなく、その存在を考慮してカマド向脇にセクションベルトを設定するのも有効であろう。古代の竪穴建物跡は、柱穴や貯蔵穴、壁溝、カマドなどの有無が判明すればいいのではない。さまざまな施設の存在を想定し、目的意識をもって調査にあたらなければ、本来あるモノが無いという事態に陥りかねない。今後も目的意識をもって調査に臨みたい。

末筆ではあるが、極寒の中、現場作業にあたっていただいた作業スタッフをはじめ、ご指導をいただきました各関係諸機関に厚く御礼を申し上げたい。

【参考文献】

- 桐生直彦 2005『竪をもつ竪穴建物跡の研究』六一書房
山梨県 2004『山梨県史 通史編1 原始・古代』
八代町教育委員会 1990『遺跡詳細分布調査報告書』八代町埋蔵文化財調査報告書第7集
山梨県教育委員会 1995『山梨県古代官衙・寺院跡詳細分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第106集

第1表 町屋遺跡 SK(土坑・ピット)一覧表

※数値における() = 現存値 / [] = 推定値を示す

SK No.	博番号	位置 (地区・Grid等)	重 横	形 状	長 軸 m	短 軸 m	深 さ m	出土遺物/備考
SK1	第6回	X20・21Y23・24	S11	楕円形	1.05 (0.3)	0.4	SI1を掘り込む	
SK2	第10回	X13・14Y22・23	なし	円形か	1.34 (0.77)	0.64	上部器片・縄文後期土器片出土	
SK3	第10回	X13・14Y24	なし	楕円形か	1.34	1.14	0.58	打製石斧出土
SK4	第10回	X12・13Y24・25	なし	楕円形か	1.22 (0.45)	0.18		
SK5	第10回	X11・12Y24	なし	楕円形か	2.36 (1.08)	0.72	縄文後期土器片出土	
SK6	第11回	X11Y21・22	SD1	楕円形か	0.65 (0.46)	0.56	SD1を掘り込む	
SK7	第11回	X10Y21・22	SD1	楕円形	0.91	0.76	0.49	SD1が上部に構築、縄文前中期土器片出土
SK8	第11回	X9Y21	なし	楕円形か	0.90	0.21	0.31	
SK9	第11回	X9Y20	SD2	円形か	0.67 (0.34)	0.67	SD2を掘り込む	
SK10	第8回	X10Y13・14	S16	楕円形か	1.01 (0.6)	0.61	SI6を掘り込む、土師質土器片出土	
SK11	第8回	X9Y17	S15	円形か	0.55 (0.37)	0.49	SI5を掘り込む。上面に灰層あり、土師器窓片・須恵器窓片出土	
SK12	第8回	X10Y14	S16	楕円形か	(0.82)	(0.24)	0.44	SI6を掘り込む
SK13	第8回	X10Y14	S16	楕円形	0.78	0.57	0.44	SI1との新旧関係不明瞭、灰釉陶器片出土
SK14	第8回	X9・10Y14	S16	楕円形か	(1.08)	(0.75)	0.28	SI6の床下土坑か、灰釉陶器片・瓦片・灰釉陶器片出土
SK15	第8回	X10Y14・15	S16	楕円形か	0.57 (0.46)	0.25	SI6の床下土坑か	
SK16	第12回	X12・13Y5・6	なし	楕円形か	(0.78)	(0.77)	0.50	覆土中に甃を多く含む、上部器片および壺片出土
SK17	第12回	X12・13Y5・6	SK18	楕円形	0.57	0.56	0.49	SK18を掘り込む
SK18	第12回	X12・13Y5・6	SK17	楕円形	0.50 (0.46)	0.39		
SK19	第8回	X9Y14・15	S16	楕円形か	0.71 (0.36)	0.41	SI6の床下土坑出土	
SK20	第8回	X9・10Y14・15	S16	楕円形か	0.9	0.74	0.27	SI6の床下土坑か
SK21	第9回	X10Y12	S17	楕円形か	(0.7)	(0.47)	0.33	SI7の床下土坑か、土師質瓦多数出土
SK22	第9回	X10・11Y11・12	S17・SK23	楕円形か	1.45 (0.76)	0.22	SI7の床下土坑か、土師質瓦片・縄文中期土器片出土	
SK23	第9回	X11Y11	S17・SK22	楕円形か	(0.35)	(0.34)	0.20	SI7の床下土坑か
SK24	第9・12回	X11Y9・10	SK25・26	楕円形か	(0.58)	(0.4)	0.26	
SK25	第9・12回	X11Y9	SK24・26	楕円形か	0.72 (0.36)	0.27		
SK26	第9・12回	X11Y9	SK24・25・27・ 29・43	楕円形か	(0.37)	0.57	0.22	
SK27	第9・12回	X11Y9・10	SK26・41～43	楕円形か	(0.6)	(0.44)	0.25	
SK28	第9回	X10・11Y10	SK40～42	楕円形か	0.39 (0.25)	0.45		
SK29	第9・12回	X11Y9	SD6・SK26・43	楕円形か	(0.63)	(0.34)	0.35	
SK30	第12回	X11Y9・9	SD6	楕円形	0.47	0.4	0.45	
SK31	第12回	X11・12Y8	SD6	楕円形か	0.48 (0.4)	0.39	土師質土器片出土	
SK32	第12回	X12Y7	なし	楕円形	0.27	0.23	0.28	柱穴状の土壙堆積状を示す
SK33	第9回	X11Y10・11	S17・SK31・36	楕円形か	0.75 (0.35)	0.27	SI7の床下土坑か	
SK34	第9回	X11Y10	S17・SK32・45	楕円形か	(0.7)	(0.45)	0.19	SI7の床下土坑か
SK35	第9回	X10・11Y10・11	S17・SK33・36	楕円形か	(0.55)	0.58	0.18	SI7の床下土坑か、底面に甃
SK36	第9回	X10・11Y10・11	S17・SK35・37・38	楕円形か	0.92	0.5	0.2	SI7の床下土坑か
SK37	第9回	X10・11Y10	S17・SK38	楕円形か	(0.49)	0.42	0.44	
SK38	第9回	X10Y10	S17・SK36・37・39	楕円形か	(0.40)	0.33	0.22	SI7の床下土坑か
SK39	第9回	X10・11Y10	S17・SK38	楕円形か	(0.51)	0.5	0.33	
SK40	第9回	X10・11Y10	S17・SK28・44	楕円形か	(0.25)	0.3	0.20	
SK41	第9・12回	X11Y10	SK27・28・42	楕円形か	(0.33)	(0.21)	0.18	
SK42	第9・12回	X10・11Y9・10	SK27・28・41	円形か	0.29 (0.16)	0.38	S17に作るピットか不明	
SK43	第9・12回	X11Y9	SK26・27・29	楕円形か	(0.44)	(0.4)	0.34	SI7の床下土坑か
SK44	第9・12回	X11Y10	SK40	円形	0.22	0.20	0.14	
SK45	第9回	X11Y10	S17・SK34	楕円形か	0.37	0.33	0.24	
SK46	第9回	X10Y11	S17	楕円形か	(0.45)	(0.33)	0.18	S17の床下ピットか、擾乱に破壊される
SK47	第9回	X10Y13	S16	楕円形	0.67	0.56	0.28	SI6に作る床下土坑か
SK48	第8回	X10Y13	S16	楕円形	0.36	0.25	0.12	SI6に作る柱穴か

第2表 町屋遺跡出土土器觀察

土壤地 带	植被	样带	分带	通量 (cm·yr ⁻¹)			作物种类	施肥量 (N·kg)	施肥方法	施肥期	施肥时 间
				口粮	菜园	林地					
5.77	Ⅰ型旱生灌木群落	Ⅱ-1	山杨林	6.7	6.6	2.9	48	—	(1) 施用厩肥	月-年	春-秋
5.77	Ⅰ型旱生灌木群落	Ⅱ-2	红松林	1.7	3.7	2.1	24.5	—	1. 施用厩肥	月-年	春-秋
5.77	Ⅰ型旱生灌木群落	Ⅲ-1	红松林	14.4	2.1	—	—	2. 施用厩肥	月-年	春-秋	
5.77	Ⅰ型旱生灌木群落	Ⅲ-2	红松林	—	—	—	—	3. 施用厩肥	月-年	春-秋	

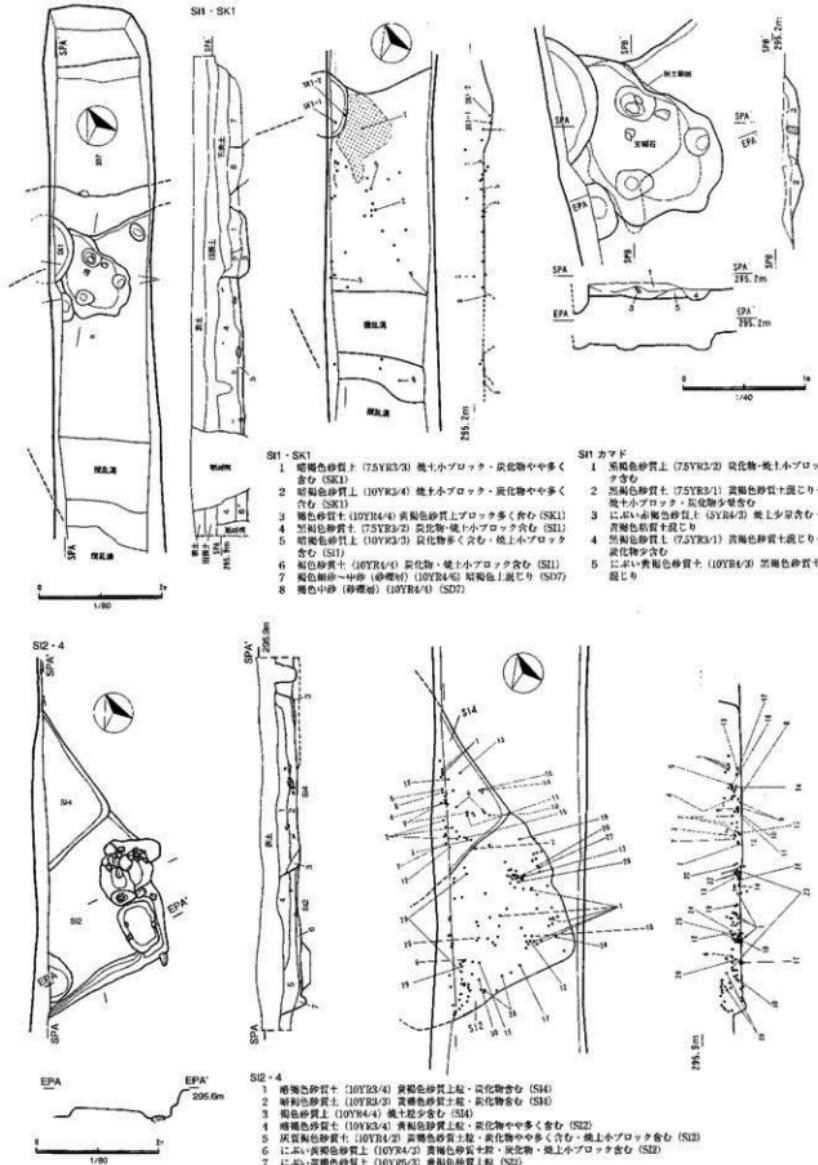
第3表 町屋遺跡出土土製品觀察表

第4表 町屋遺跡出土金属製品観察表

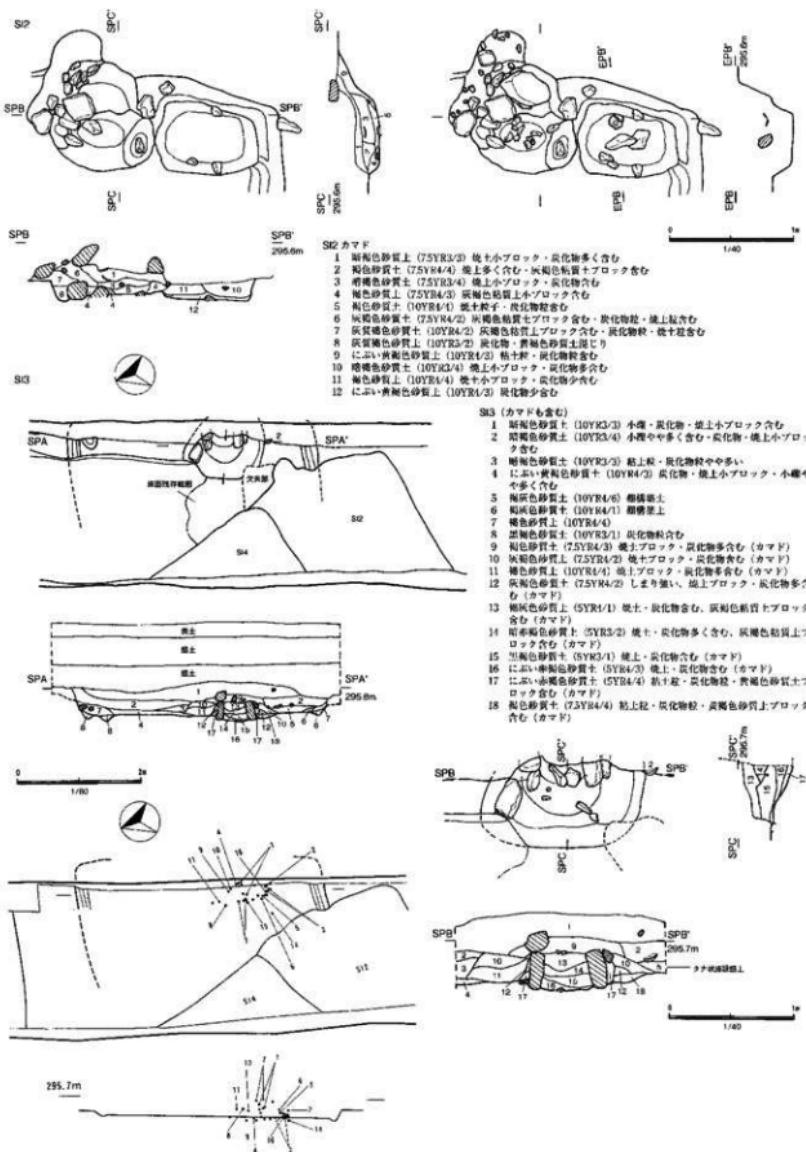
出土地点	図版	番号	分類	法量(cm) 溝()は推定値又は現存値				材質	備考
				長	幅	厚	重量(g)		
武者64	第22回	30	鉄錐点	(16.0)	4.2	0.3	(21)	鉄	SSTに作るものだろう

第5表 可屋遺跡出土石製品観察表

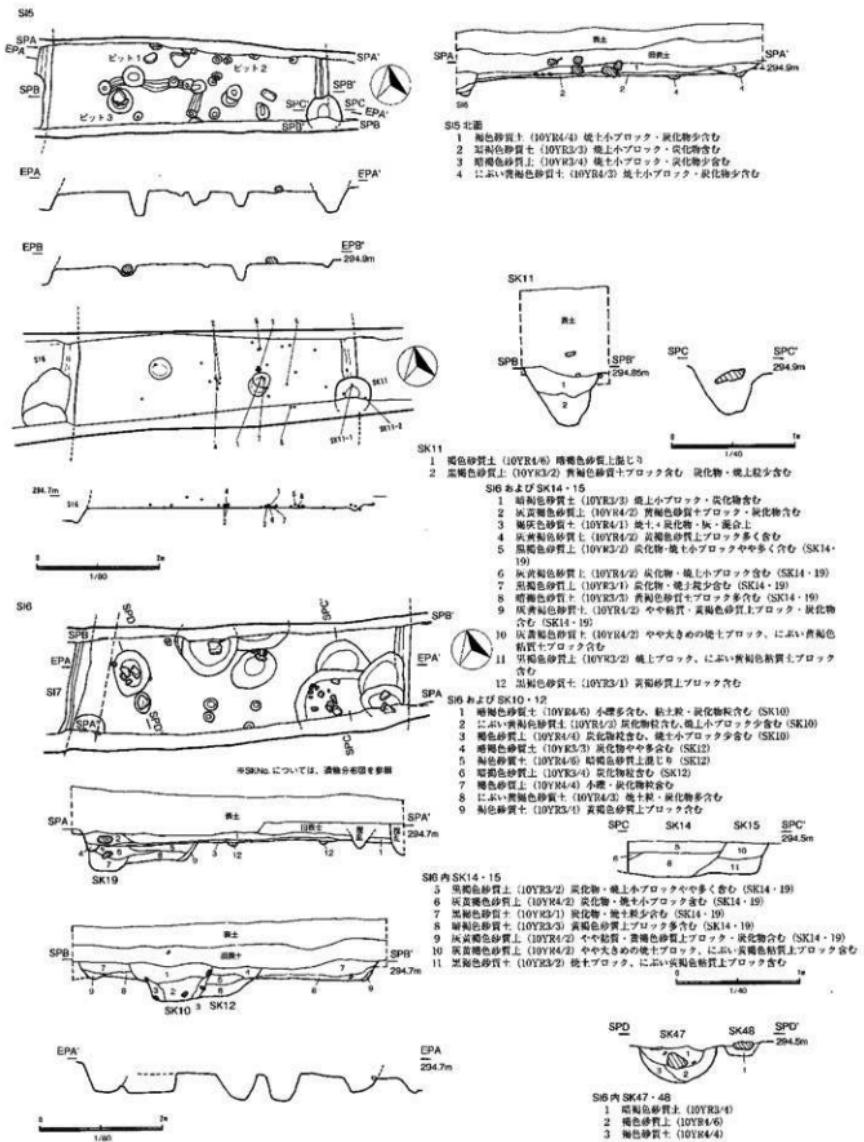
出土地点	図版	番号	分類	長さ・幅・厚さ(cm)	重さ(g)	石材	欠損状況	備考
S12	第15回	28	圓石	11.1・7.2・3.2	479	-	一部欠け	表面も部分的にみられる
S12	第16回	30	山積片	2.6・2.0・1.5	9	玄武岩	-	-
S33	第18回	1	打削石斧	10.3・4.3・2.2	114	-	-	-
武者64	第23回	27	打削石斧	9.3・4.5・1.4	80	-	-	-



第6図 SII-1・2・4号窓穴跡、SK1

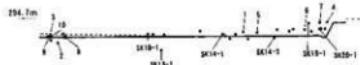
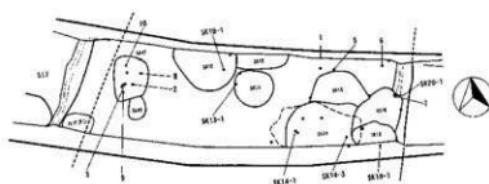


第7図 SI2・3号竪穴建物跡



第8図 SI5・6号竪穴建物跡、SK10～15・19・20・47・48 (SI6中にもSK番号あり)

SI6



SKNo.

について

は、

地

図

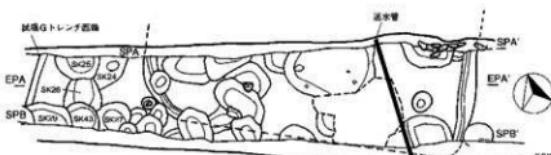
を

採

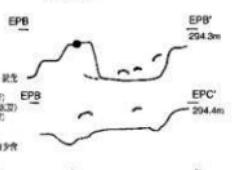
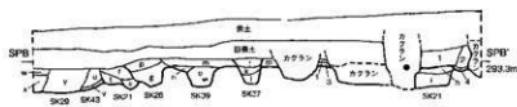
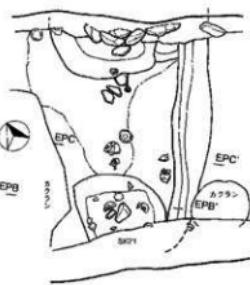
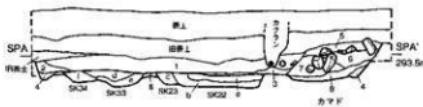
用

す。

SI7



SKNo.についても、地図名を参照



SIおよびSIK21～23・27・29・33・34・37・39・43

1 砂質砂質土 (SKW44) 小透鏡ごり・赤透鏡・褐色・褐色

2 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

3 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

4 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

5 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

6 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

7 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

8 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

9 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

10 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

11 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

12 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

13 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

14 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

15 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

16 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

17 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

18 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

19 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

20 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

21 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

22 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

23 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

24 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

25 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

26 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

27 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

28 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

29 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

30 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

31 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

32 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

33 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

34 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

35 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

36 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

37 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

38 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

39 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

40 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

41 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

42 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

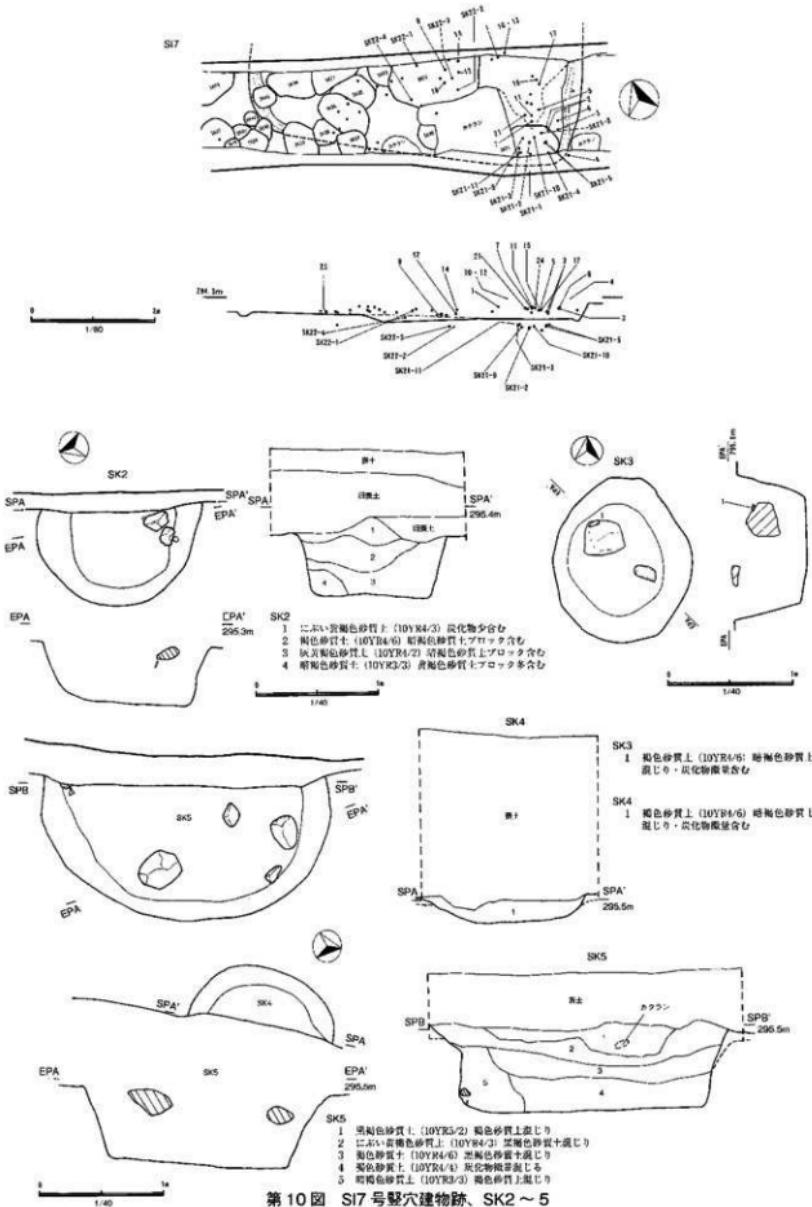
43 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

44 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

45 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

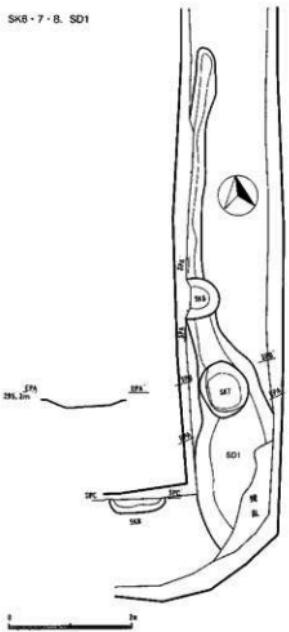
46 黄褐色砂質土 (SKW44) 褐色透鏡・褐色透鏡・褐色

第9図 SI6・7号壁穴建物跡、SK21～29・33・34～46 (SI7遺物分布図中にもSK番号あり)

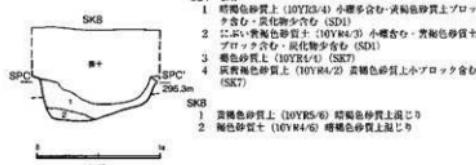


第10図 SI7号竪穴建物跡、SK2~5

SK6・7・8, SD1

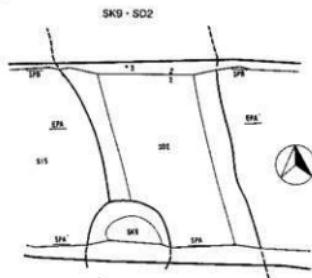


- SK6
- 褐色砂質土 (I0YB4-4) 黄褐色砂質土混じり
 - 褐色砂質土 (I0TR4-6) 黄褐色砂質土混じり
 - 黄褐色砂質土 (I0YB4-2) 水化物少含む・黄褐色砂質土小ブロック含む

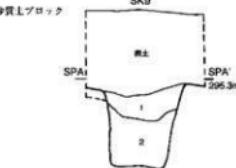
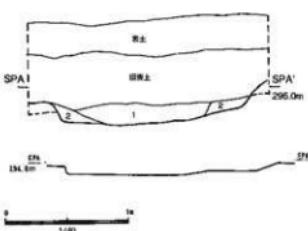
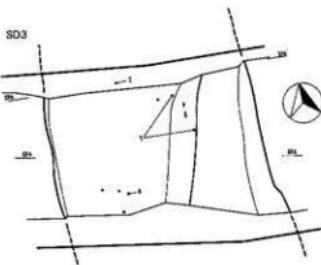


- SK7
- 褐色砂質土 (I0YB4-4) 黄褐色砂質土混じり
 - 褐色砂質土 (I0TR4-6) 黄褐色砂質土混じり
 - 黄褐色砂質土 (I0YB4-2) 水化物少含む・黄褐色砂質土小ブロック含む
 - 黄褐色砂質土 (I0TR4-4) (SK7)
 - 黄褐色砂質土 (I0YR4-2) 黄褐色砂質土小ブロック含む (SK7)

- SK8
- 褐色砂質土 (I0YR5-6) 黄褐色砂質土混じり
 - 褐色砂質土 (I0YR4-6) 黄褐色砂質土混じり

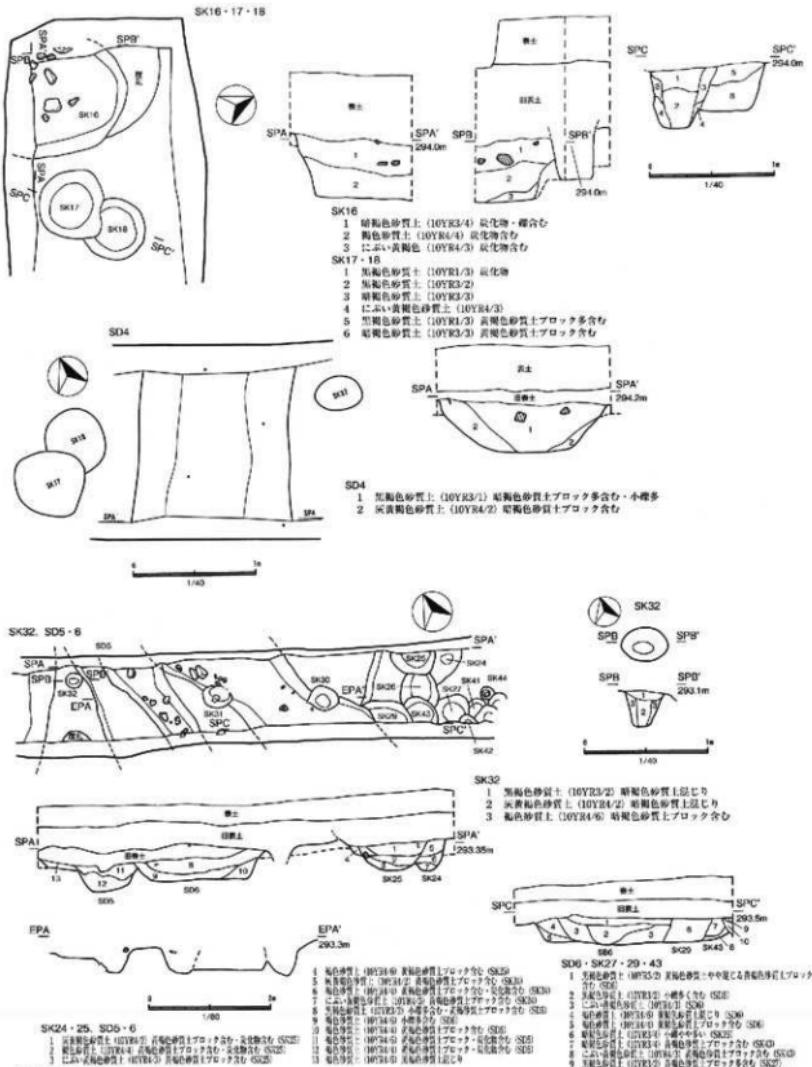


- SD3
- 褐色砂質土 (I0YR5-3) 黄褐色砂質土ブロック・塊状・水化物少含む
 - 褐色砂質土 (I0TR6-6) 黄褐色砂質土ブロック・水化物少含む



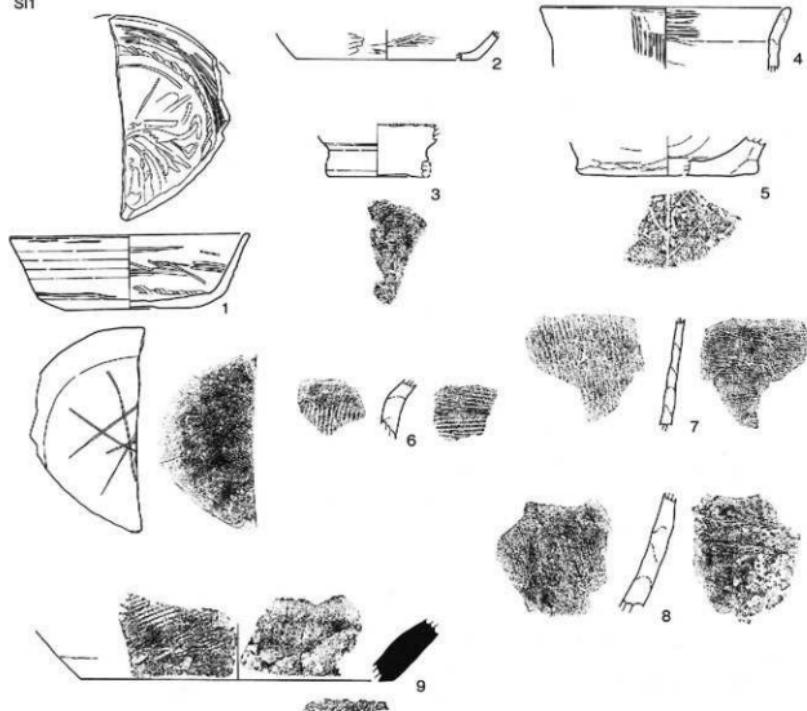
- SK9
- 褐色砂質土 (I0YR4-4) 黄褐色砂質土混じり・黄褐色砂質土ブロック多含む
 - 黄褐色砂質土 (I0YR4-2) 黄褐色砂質土小ブロック含む
 - 褐色砂質土 (I0YR4-4) 黄褐色砂質土混じり

第11図 SK6～9, SD1～3

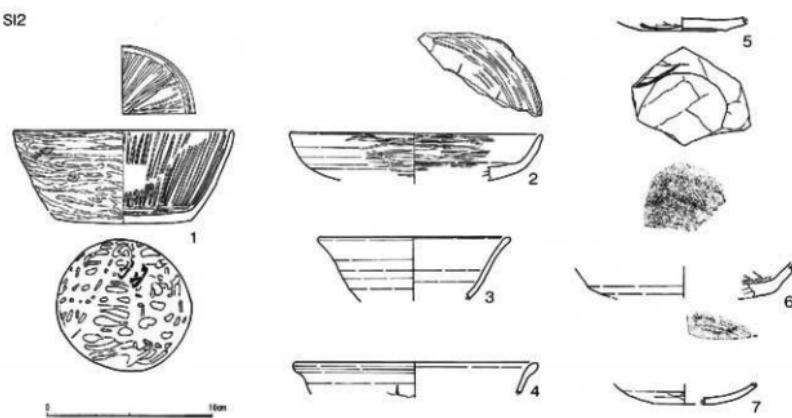


第12図 SK16~18・24~27・29~32・41~44、SD4~6・8・9

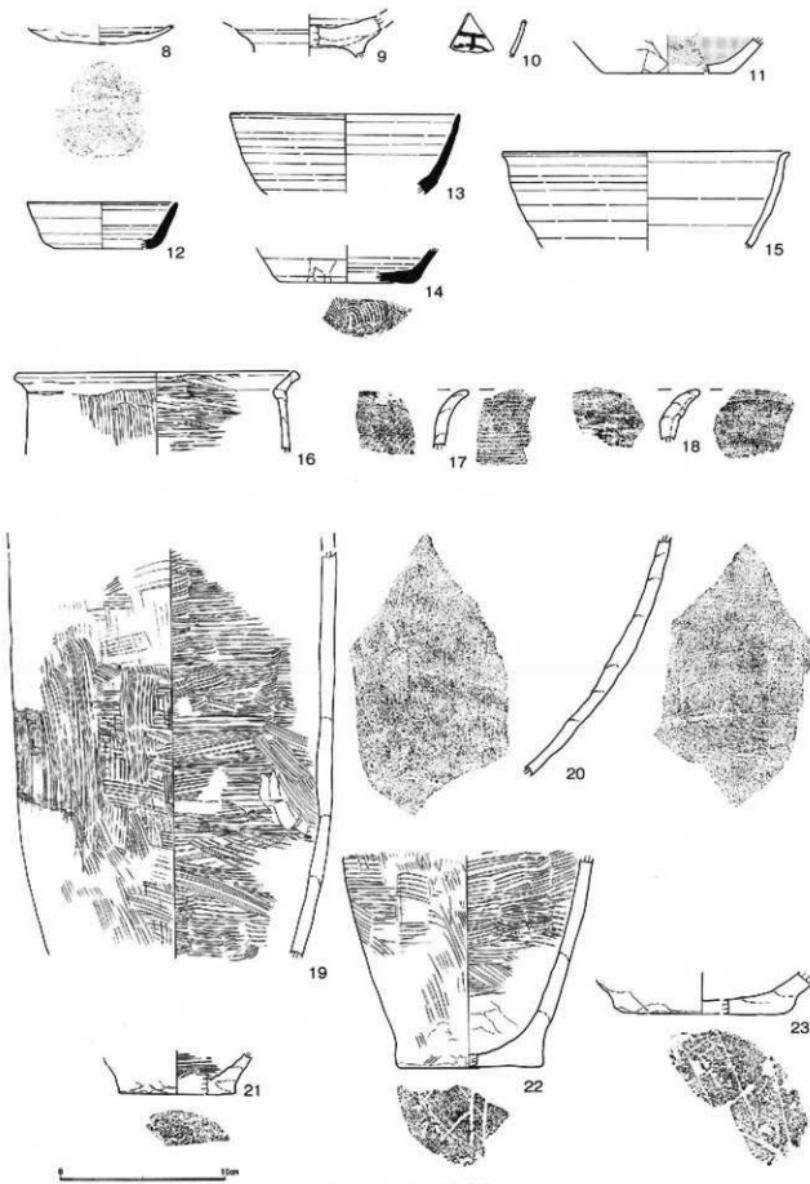
SI1



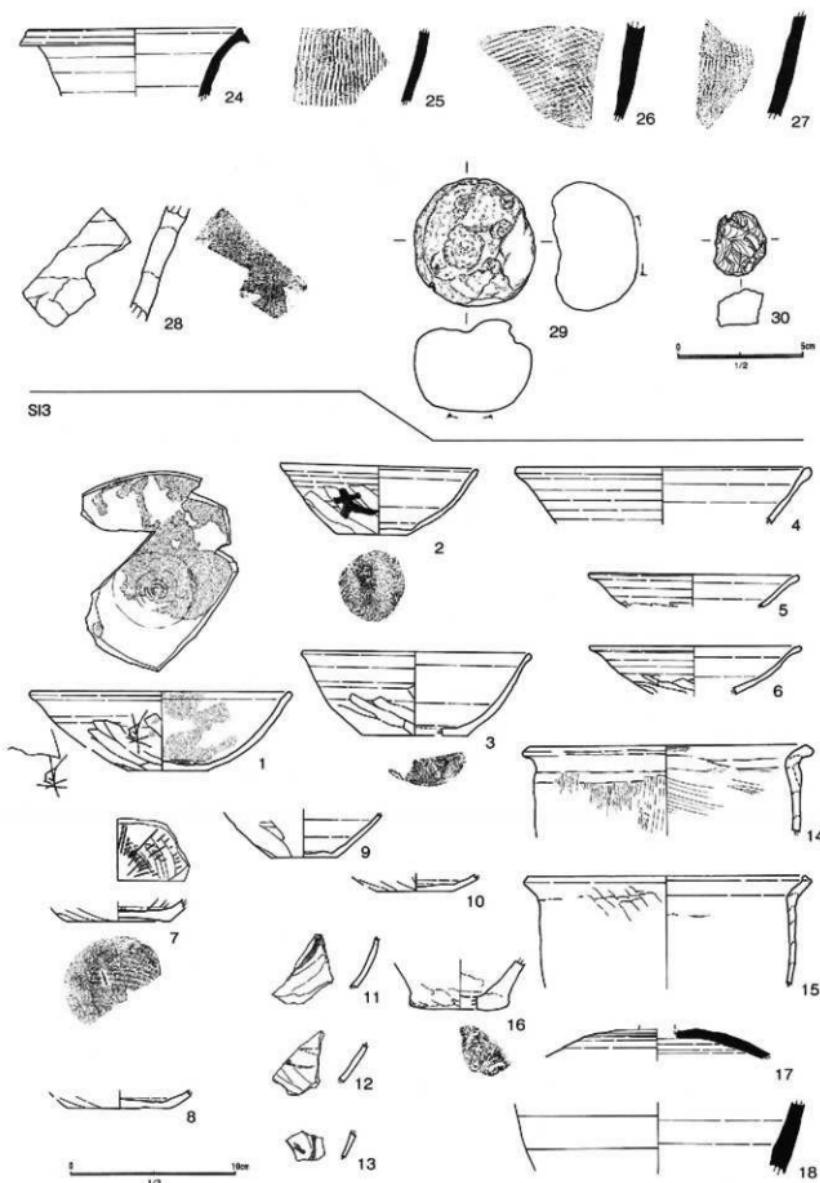
SI2



第13図 SI1・2出土遺物

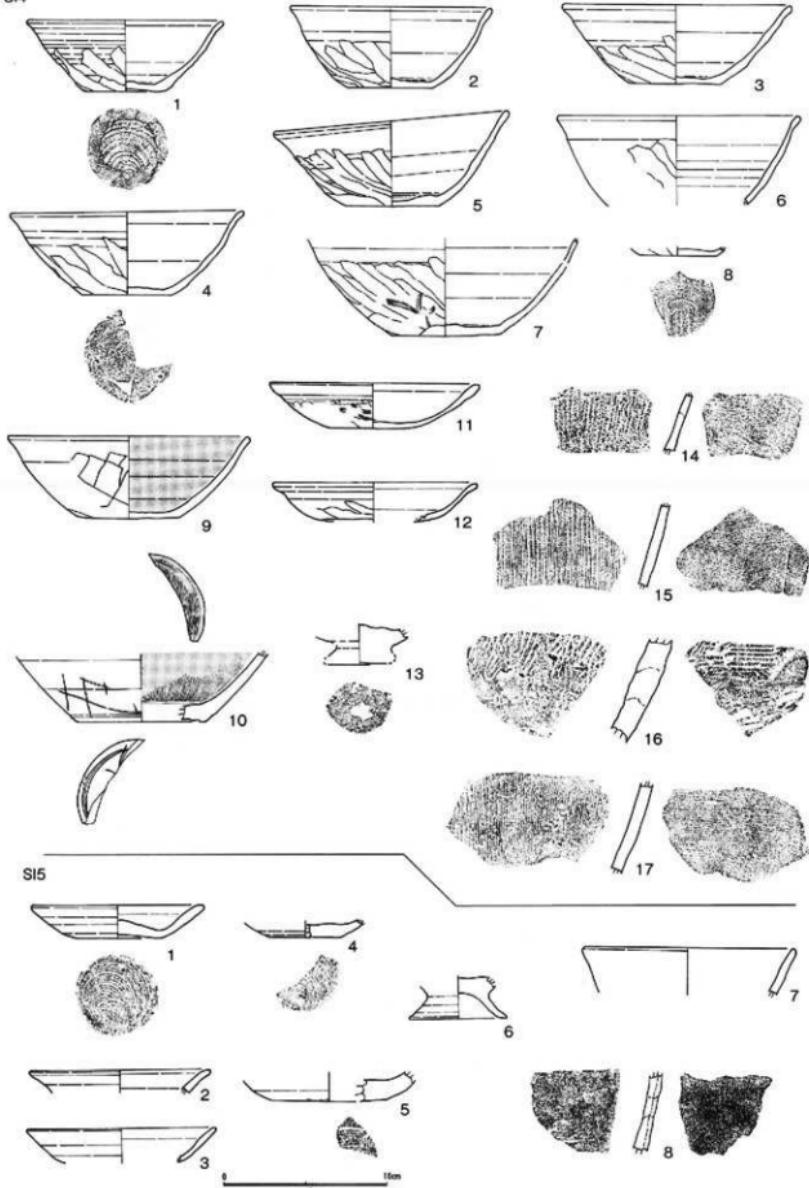


第14図 SI2出土遺物



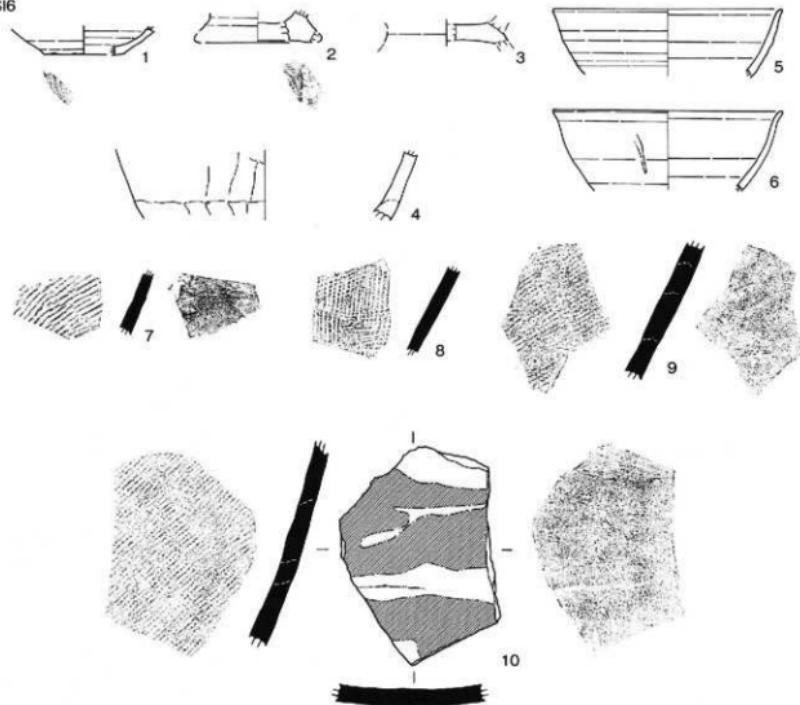
第15図 SI2・3出土遺物

SI4

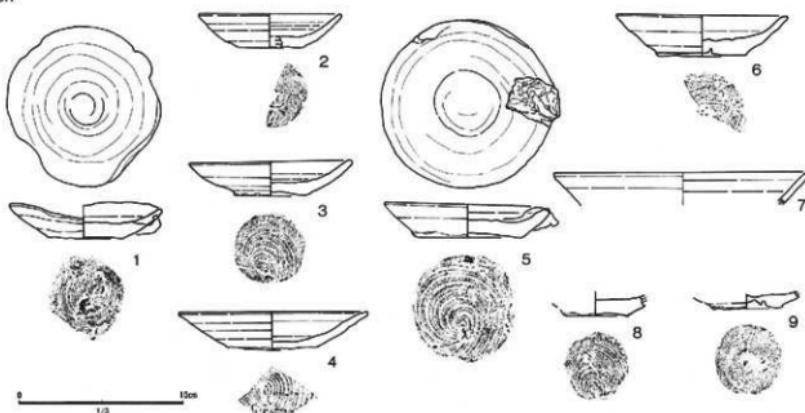


第16図 SI4・5出土遺物

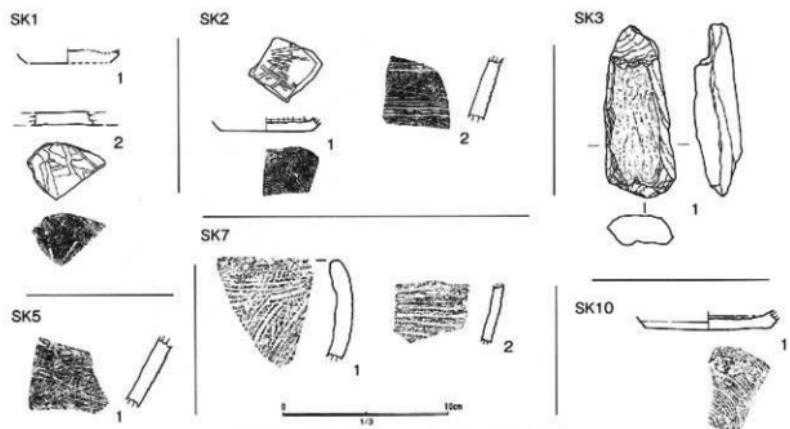
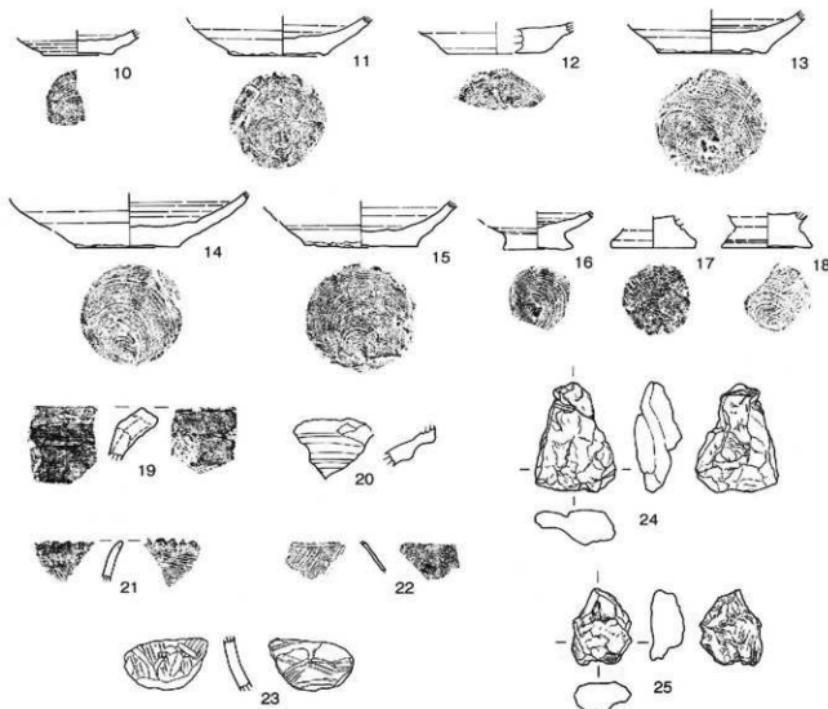
SI6



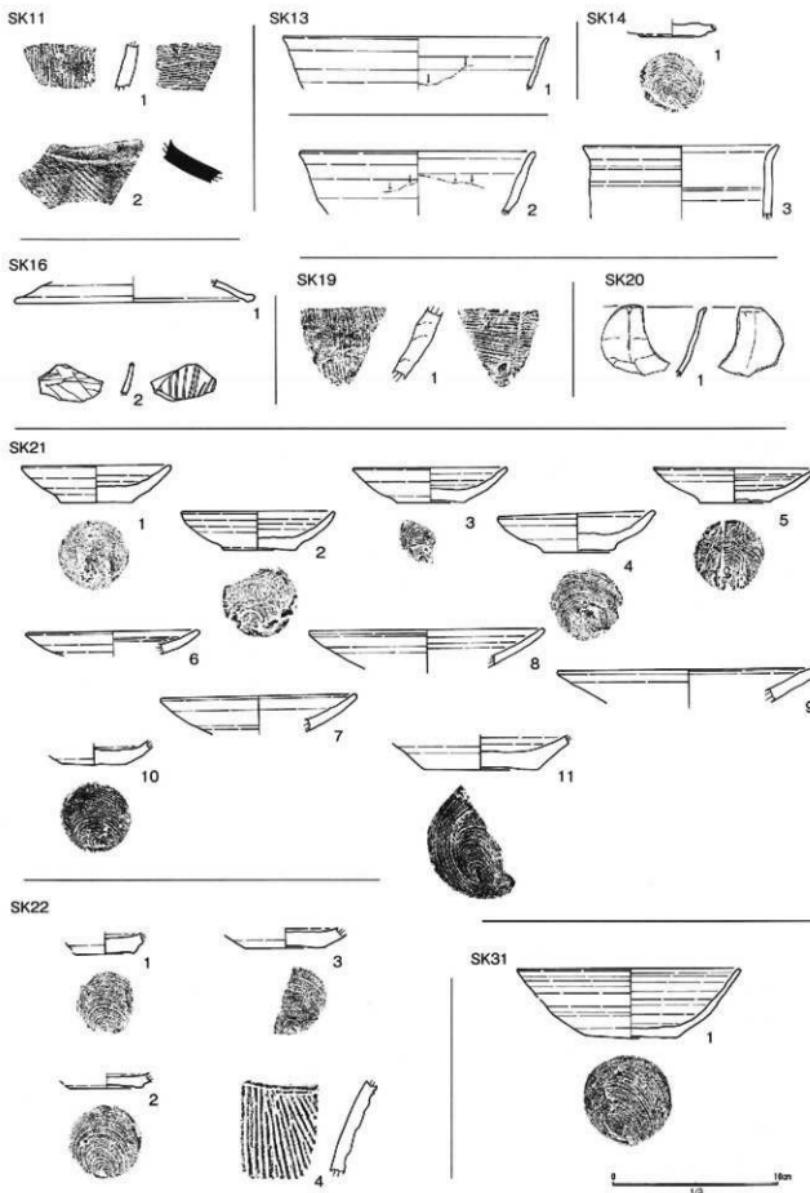
SI7



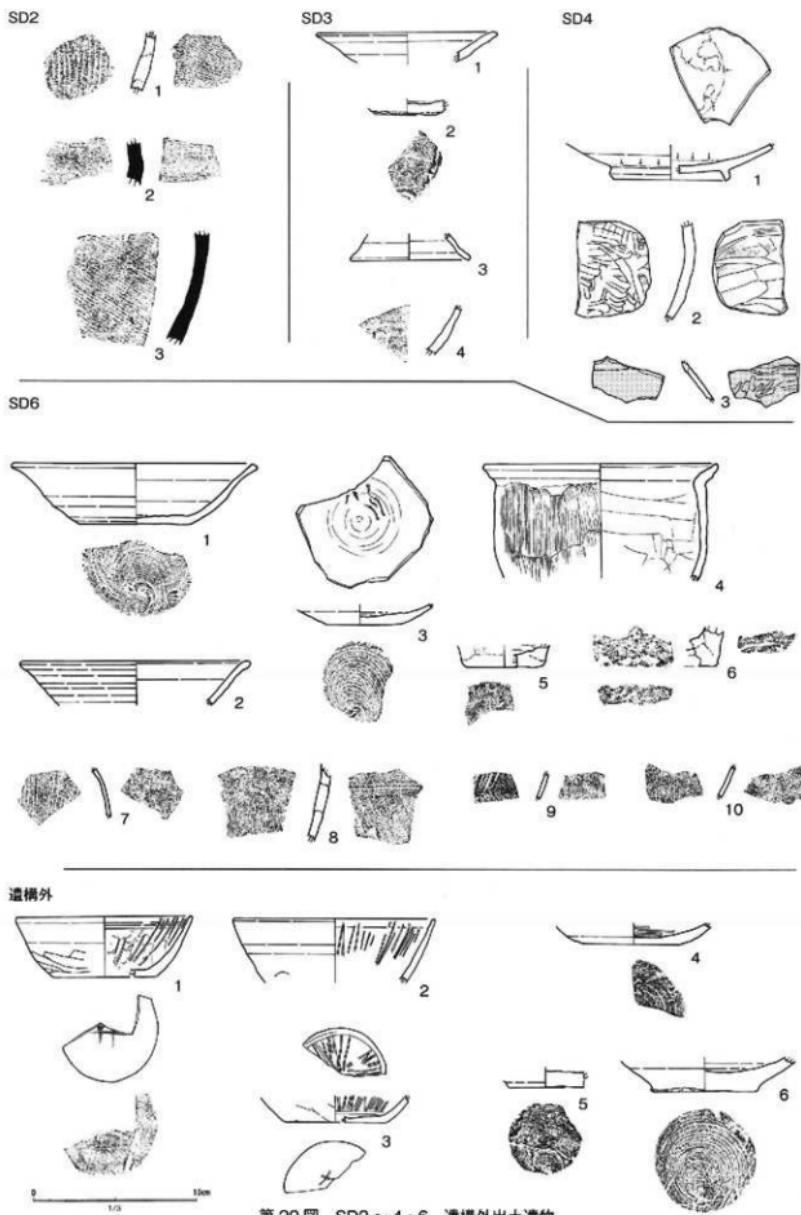
第17図 SI6・7出土遺物

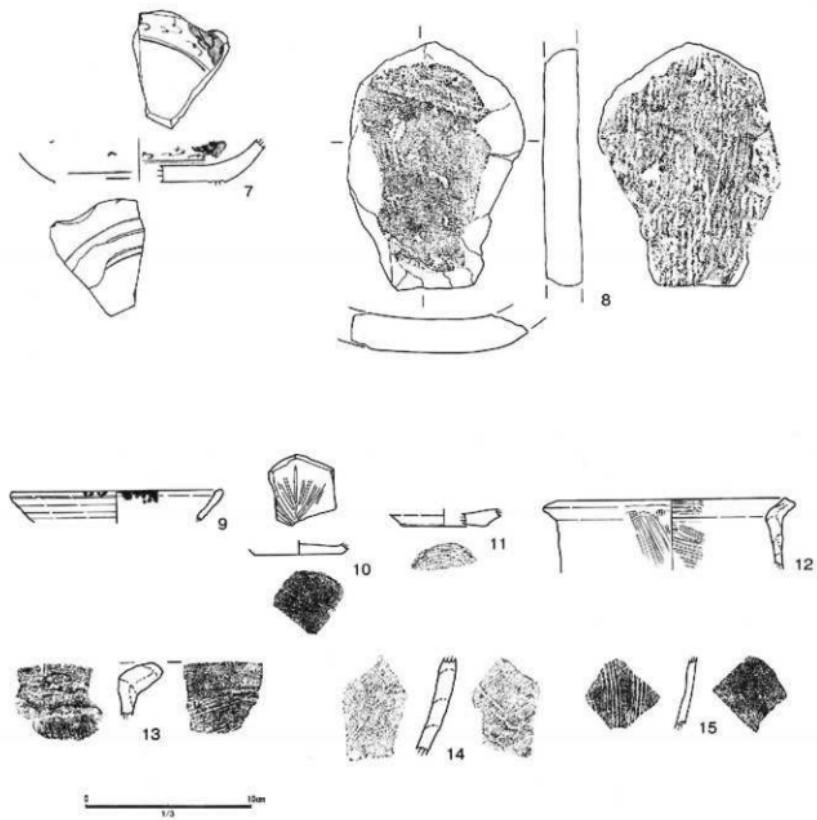


第18図 SI7・SK1～3・5・7・10出土遺物

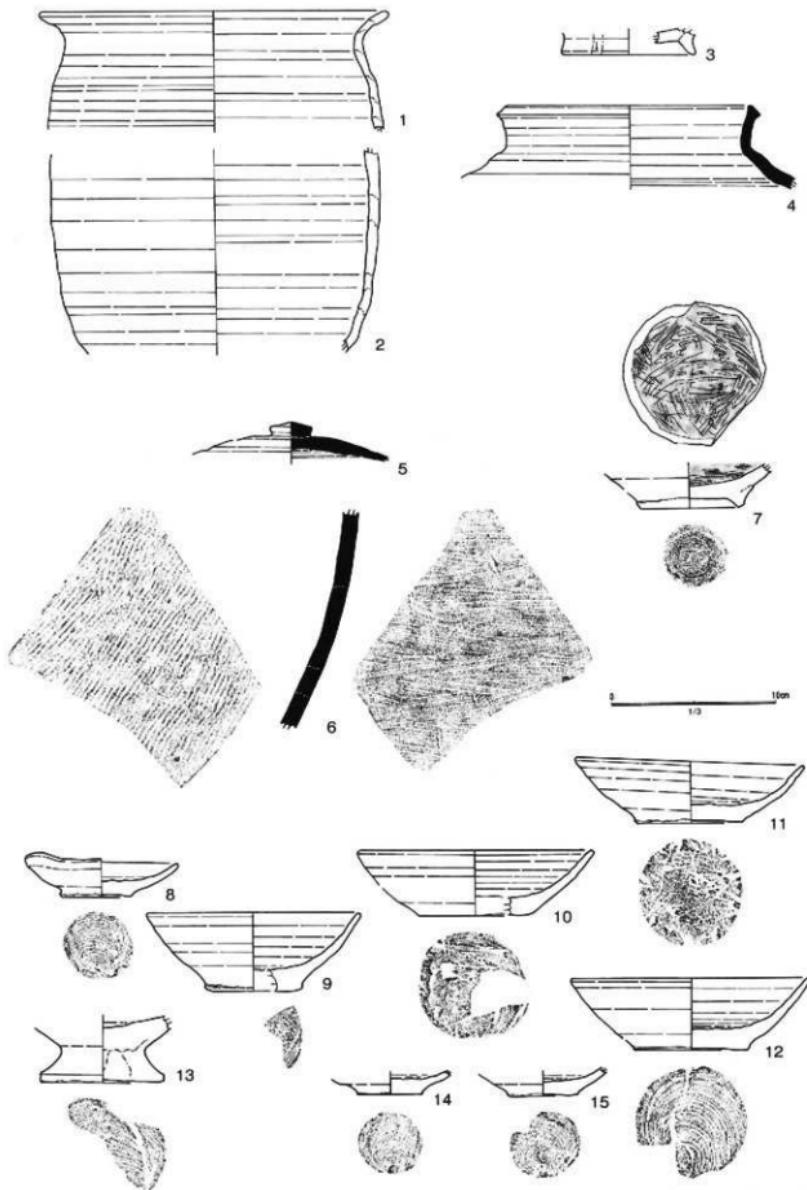


第19図 SK11・13・14・16・19・20～22・31出土遺物

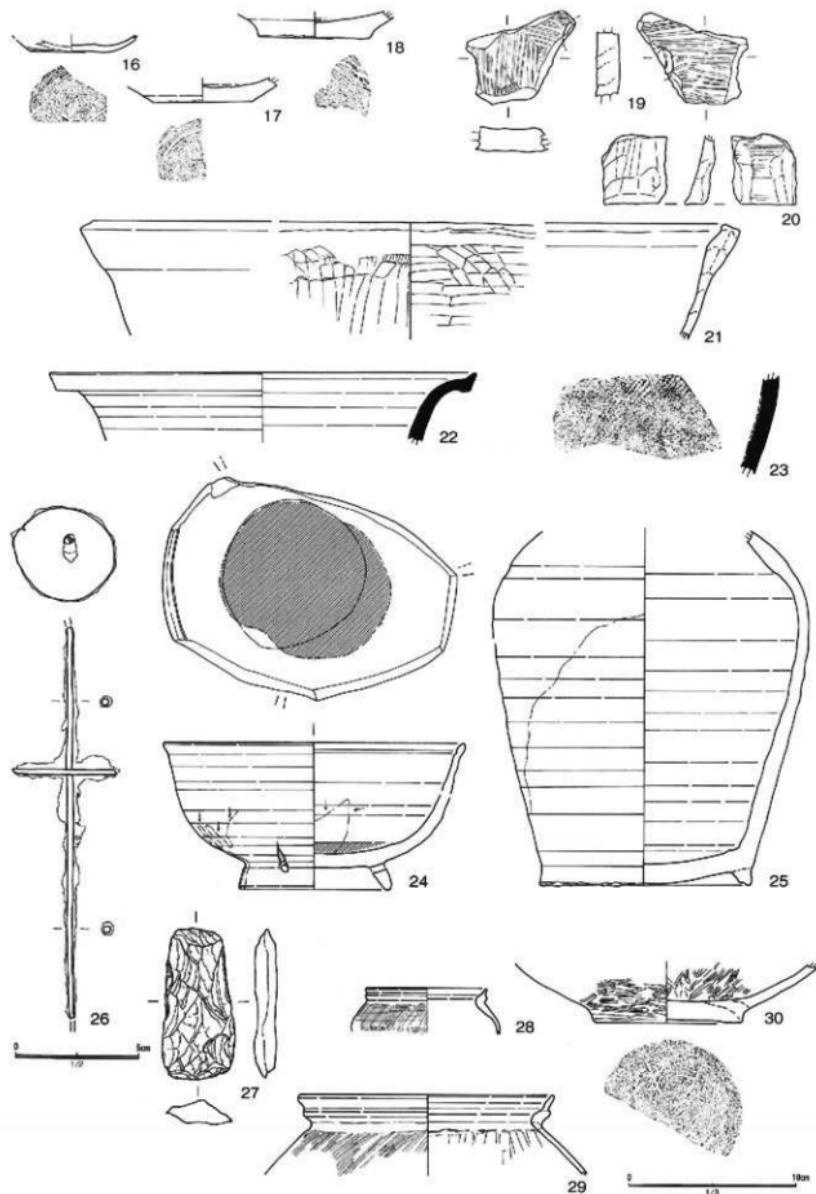




第21図 遺構外出土遺物



第22図 試掘調査出土遺物(1)(1・2:Bトレンチ、3・4:Cトレンチ、5・6:Eトレンチ、7:Fトレンチ、8~15:Gトレンチ)



第23図 試掘調査出土遺物(2) (16~27:Gトレンチ、28~30:Hトレンチ)

図版

図版 1



1. 遺跡調査前状況
(第 1 トレンチ付近、東から)



2. 遺跡調査前状況
(第 2・3 トレンチ付近、南から)



3. 遺跡調査前状況 (第 2 トレンチ
東西ライン付近、西から)



4. 重機によるトレンチ掘削風景 1



5. 重機によるトレンチ掘削風景 2



6. 調査風景 1



7. 第 2 トレンチ東西ライン完掘全景



8. 第 2 トレンチ東南北ライン完掘
近景 (南東から)



9. 第 2 トレンチ南北ライン・
第 3 トレンチ完掘近景 (南東から)



10. 第 3 トレンチ完掘近景 (北から)



11. 第 3 トレンチ完掘近景
(南から)



12. 第 1 トレンチ (SD8・9)
完掘全景 (南から)



13. 第 1 トレンチ (SD8・9)
西壁南側セクション (北東から)



14. 第 1 トレンチ (SD8・9)
西壁北側セクション (北東から)



15. 第 2 トレンチ (SD7)
検出状況 (東から)



16.SI1 完掘状況（南東から）



17.SI1 遺物出土状況（南から）



18.SI1 カマド完掘状況



19.SI2・4 完掘状況（西から）



20.SI2 カマド完掘状況



21.SI2 カマド遺物出土状況



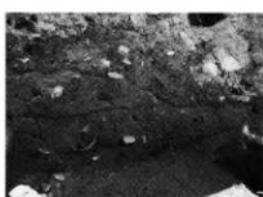
22.SI2 カマド跡遺物出土状況



23.SI3 完掘状況（西から）



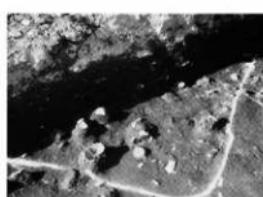
24.SI3 カマド検出状況



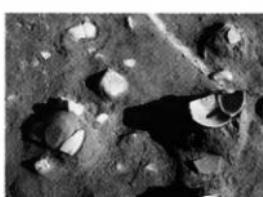
25.SI3 棚状施設セクション



26.SI3 棚状施設上面出土土器



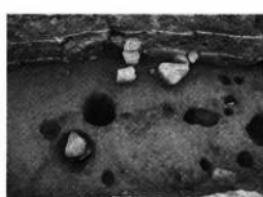
27.SI4 遺物出土状況全景（南東から）



28.SI4 遺物出土状況近景



29.SI5 完掘状況（東から）



30.SI5 内間仕切り施設等検出状況（南から）

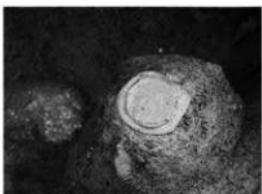
図版3



31.SK16 完掘状況（東から）



32.SK16 内 SK14・15・19・20 完掘状況
(南から)



33.SK16 内 SK14 遺物出土状況



34.SK16 内 SK10・12 棟出状況



35.SK17 完掘状況（南西から）



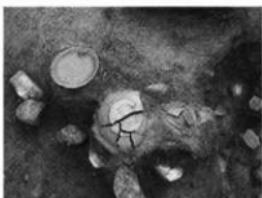
36.SK17 カマド検出状況



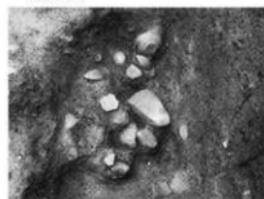
37.SK17 カマド周辺部遺物出土状況
(西から)



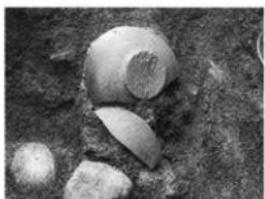
38.SK17 カマド前面土器出土状況



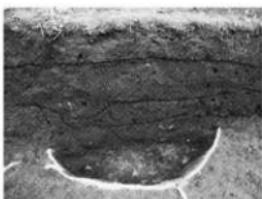
39.SK17 カマド南脇遺物出土状況



40.SK17 内 SK21 遺物出土状況



41.SK17 内 SK21 遺物出土状況近景



42.SK1 検出状況（東から）



43.SK2 検出状況（西から）



44.SK3 遺物出土・完掘状況（北東から）



45.SK3 遺物出土状況



46.SK4・5 完掘状況（西から）



47.SK5 完掘状況（東から）



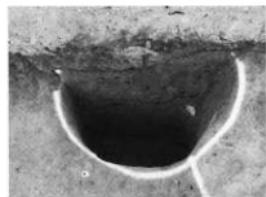
48.SD1・SK6・7 完掘状況
(北東から)



49.SK6・7 完掘状況（南東から）



50.SK9・SD2 完掘状況（東から）



51.SK9 完掘状況（北から）



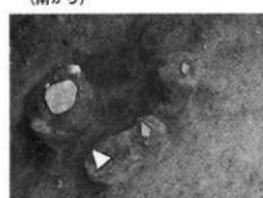
52.SK24～29・40～45 等 完掘状況
(南から)



53.SK32 完掘状況（南から）



54.SD3 完掘状況（東から）



55.SD3 遺物出土状況



56.SD4 完掘状況（北から）



57.SD5・6, SK31 完掘・遺物出土状況
(南から)



58.SD6・SK31 遺物出土状況（北から）

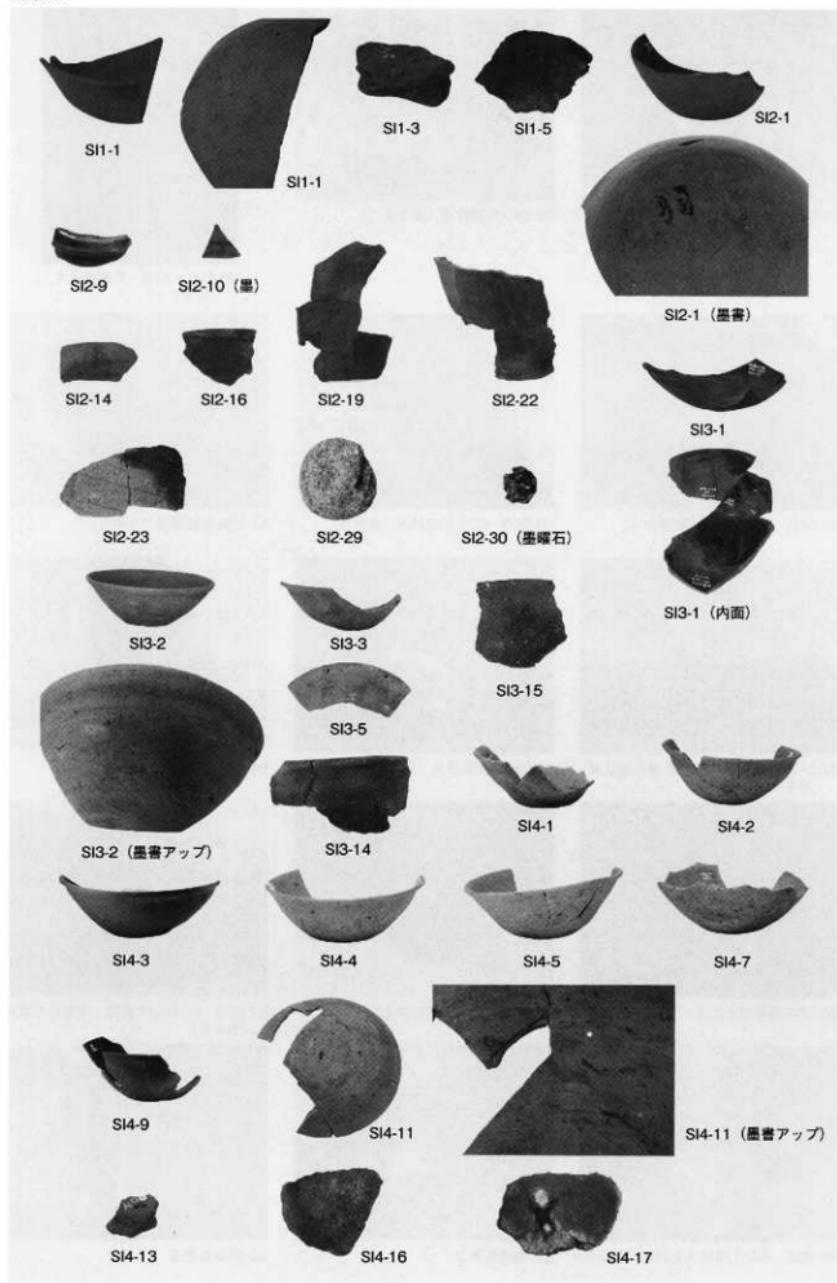


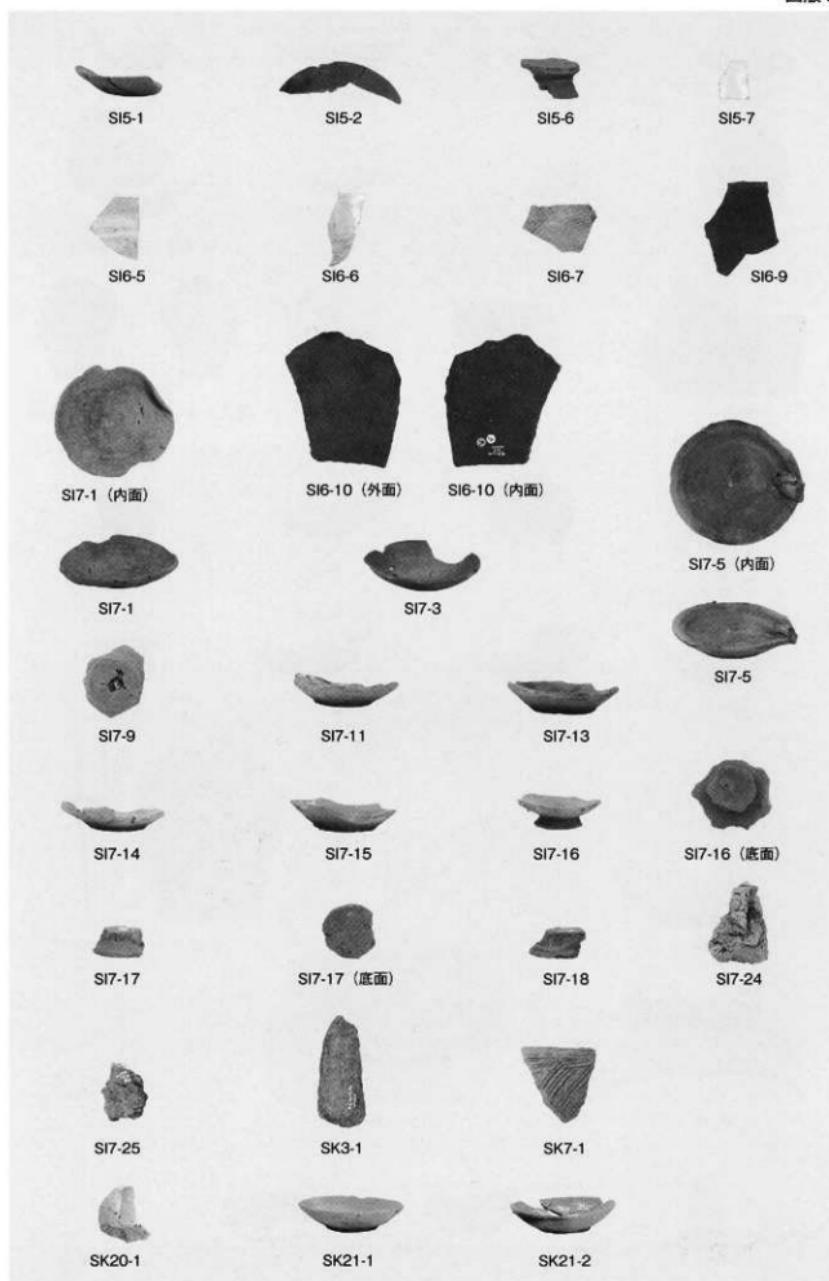
59. 調査風景 2



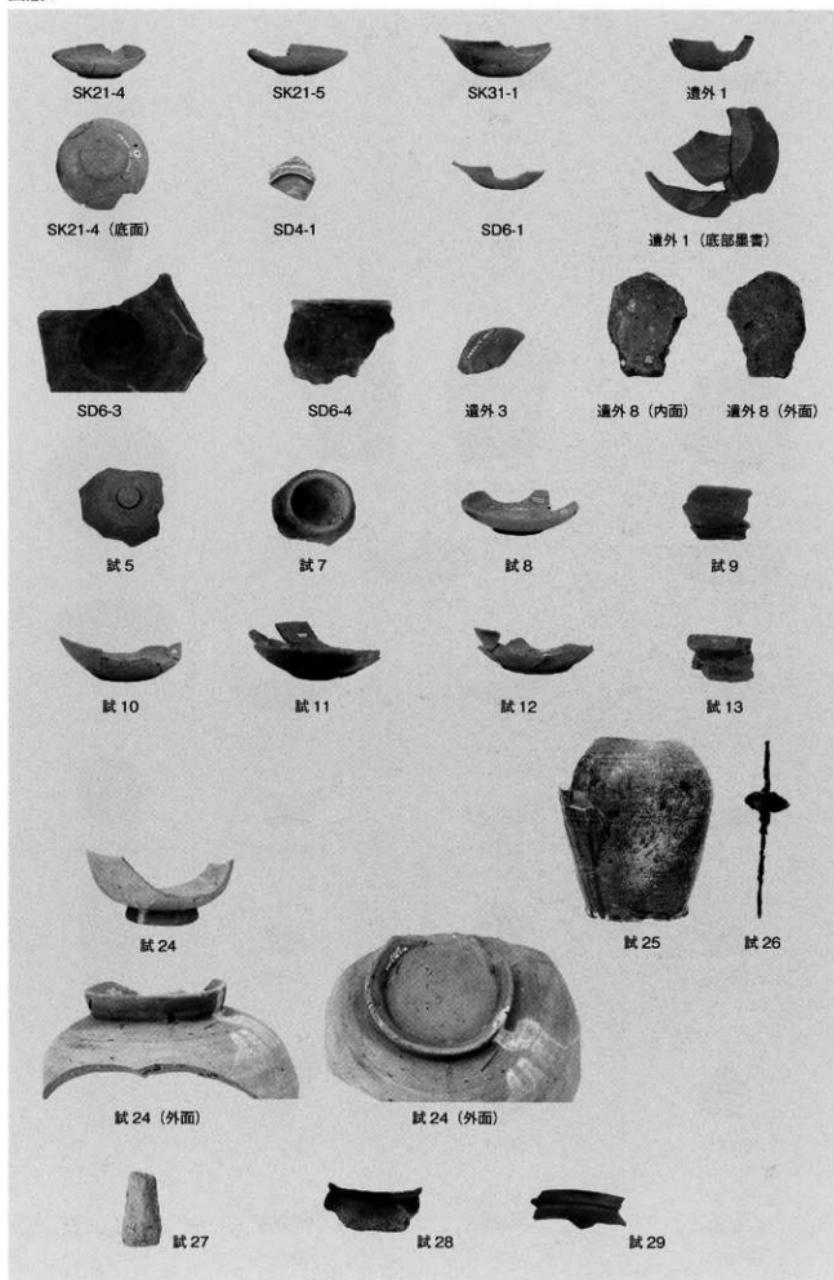
60. 調査風景 3

図版5





圖版 7



報告書抄録

フリガナ	マチヤイセキ				
書名	町屋遺跡				
副書名	市道八代 711、719、758 号線改良に伴う埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書	シリーズ番号	第9集		
編著者名	平野 修				
編集機関	笛吹市教育委員会文化財課	財団法人 山梨文化財研究所			
所在地	〒406-0031 山梨県笛吹市石和町市部 809-1 TEL 055-261-3342	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566 TEL 055-263-6441 / FAX 055-261-0462			
発行年月日	平成 20 年 3 月 31 日				
所取遺跡名	町屋遺跡				
所在地	山梨県笛吹市八代町米倉 47-2 他	北緯 36° 06' 13" 東経 140° 05' 16"			
コード	市町村	251			
	遺跡番号	33			
調査期間	平成 18 年 (2006) 1 月 10 日から 2 月 28 日				
調査面積	約 200 m ²				
調査原因	市道改良工事				
種別	散布地				
主な時代	縄文時代前期・中期・後期 / 弥生時代後期 / 古墳時代前期 / 奈良時代 / 平安時代 / 中世 / 近世 / 近代 / 現代				
主な遺構	堅穴建物 / 土坑 / ピット / 溝状遺構 / 自然流路				
主な遺物	縄文式土器 / 弥生式土器 / 上師器 / 頸壺器 / 灰釉陶器 / 土師質土器 / 白磁 / 中世土師質土器 / 近・現代陶磁器 / 四石 / 打製石斧 / 石核 / 粘土塊 / 瓦 / 鉄製紡錘車				
特記事項	棚状施設をもつ平安時代の堅穴建物跡、11 ~ 12 世紀代の白磁片の出土				

なお、緯度・経度は世界測地系データに基づく数値である。

笛吹市文化財調査報告書 第9集

町屋遺跡

発行日 平成20年(2008)3月31日

編集 箕吹市教育委員会・山梨文化財研究所

発行 箕吹市教育委員会・山梨文化財研究所

印刷 株式会社帝京サービス

The Report of
Archaeological Research of MACHIYA Site

An Archaeological Rescue Survey prior to the improvement of
City Road 711, 719 and 758

March,2008

Fuefuki City Board of Education
YAMANASHI RESEARCH INSTITUTE
OF CULTURAL PROPERTIES